幼児の教育　第105巻　第11号　平成18年11月1日（毎月1回発行）昭和23年4月15日第3種郵便物認可　ISSN0289-0836

# 幼児の教育

家庭・保育所・幼稚園

特集
日本の幼稚園教育
百三十周年を迎えて

第105巻　第11号　日本幼稚園協会　2006　11

好評発売中！

## 名のない遊び

塩川寿平著

一般に、遊びを語るときには遊びに
名前（「ままごと」など）をつけて呼びます。
しかし、乳幼児の遊びを観察していると
文字や言葉で簡単に言い表せない
行為や行動、つまり「名のない遊び」が
意外と多いことに気づきます。
具体的な事例をもとに、乳幼児期における
「名のない遊び」の重要性について語ります。

26×21ｃｍ／96頁／定価2,100円（税込）

394-00

## 食を育（はぐく）む

食育実践ガイドブック

総監修　師岡章
著　倉田新・徳永恭子・野村明洋

「食育」という言葉を
「食を育む」（子どもの生活の中に存在するもの）と
捉えることを前提とし、食育に関する
実践方法・事例を、イラストや写真を豊富に用いて
具体的に楽しく紹介します。

26×21cm／160頁／定価2,100円(税込)

393-00

## 保育所の新・第三者評価（ガイドライン）の読み方・受け方

―自己を点検し、評価を受ける

小笠原文孝・小出正治　共著

平成17年5月
保育所のための第三者評価ガイドラインが
新たに生まれ変わって国から示されました。
本書では、この新・ガイドラインを詳細に解説していきます。

A4判／338頁／定価2,940円（税込）

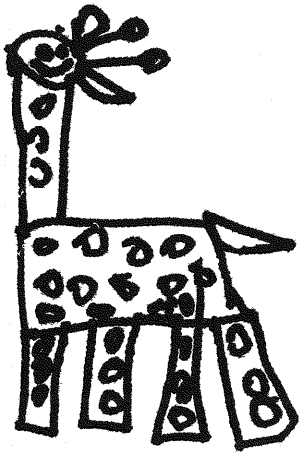
392-01

キンダーブックの
**フレーベル館**

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部（03）5395-6608にお問い合わせください。

# 幼児の教育

第105巻　第11号



# 幼児の教育　目次

## ――第一〇五巻　第十一号――


巻頭言　いのちを繋ぐ　―育ちをみつめて―……土屋　とく…（4）

特集〈日本の幼稚園教育百三十周年を迎えて〉

手引書『幼稚園（をさなごのその）』の原書とその入手経路について……大戸美也子…（8）

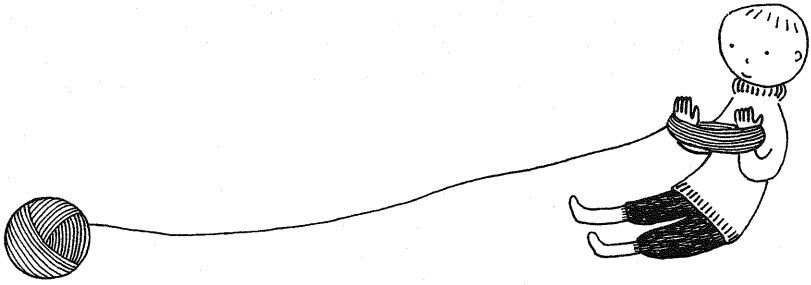
日本における幼稚園教育の確立　―保育会の果たした役割―……湯川嘉津美…（14）

引き継ぐ覚悟……松井　とし…（20）

幼稚園百三十年記念企画　アーカイブズ『幼児の教育』(4)……（26）

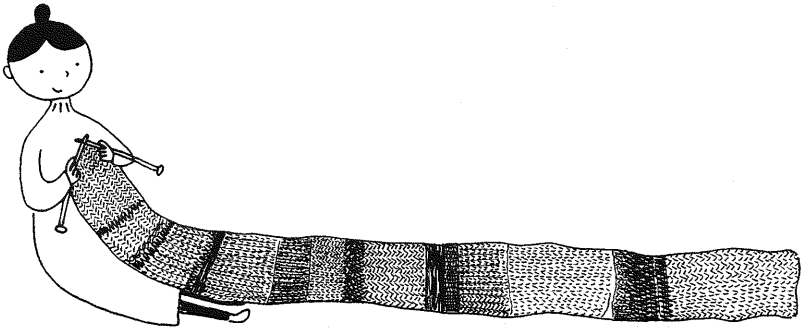


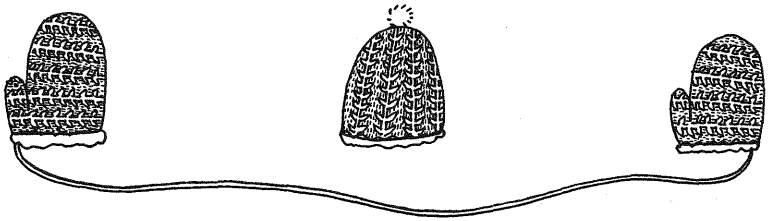
© 2006
日本幼稚園協会

働く意欲が持てない？(1)　―ニート、フリーター―……耳塚　寛明…（34）
差異を差別にではなく学びへと転換する……津守　　眞…（42）
木育フォーラムを振り返る……高橋真由美…（48）
「つながり」と「育つこと」……吉川はる奈…（54）
保育の中のつながりを求めて……伊集院理子…（58）

表紙絵／さのまきこ
扉題字／津守　眞
扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児
カット／さのまきこ
編集委員／浜口　順子・佐藤　寛子・吉岡　晶子・伊集院理子
編集部／河合　聡子





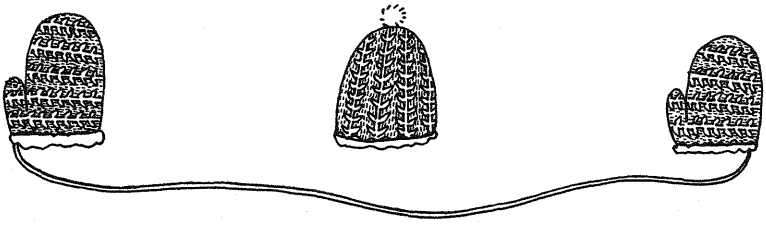
巻頭言

# いのちを繋ぐ
## ―育ちをみつめて―

土屋　とく

山の春の訪れは遅い。とりわけ今年は、四月の下旬というのに気温は零下を示し、樹々は冬の暗い色のままに静まりかえっていた。白い花を装い、その存在を真っ先に主張する〝こぶし〟も、それぞれ何輪かが僅かに見られる寂しさであった。そんな日のある朝、〝枯れ木のような〟桂〟の枝先に何か尖ったものが見え、翌日には小指の爪の形に、次には親指くらいにと拡がりをみせ、僅か週日のうちにほのかな赤みをさした立派な丸い若葉が揃って繁ったのである。そして、風が渡るたびに鈴を振り歓びを互いに言い交わすように細かく打ち震えるのだった。はからずも、この鮮やかな「いのち」の再生を目にしたとき、自然の営みの素晴らしさと伸びる芽の自発的な育ちの見事さに改めて強く感動させられた。

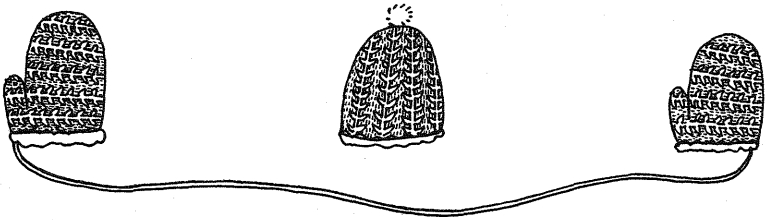
―生きとし生けるものが、それぞれに与えられている　いのち―宇宙の大きな力の中で



営まれているドラマは、樹木は木の、草花は草花の、動物は動物の、おのおのの定められた時間を最大限に活き、巧みにプログラムされた生活を過ごす。そのただなかでは、特に意識することもなく精力を傾けて日々を重ねているのだろう。そして、やがて老い、次世代へ全てを任せ再び元始へかえっていく。

人もまた、いのちの芽が与えられ、胎内で驚異的で確実な育ちを経て身体的一体から、外界での二者関係となる誕生の日を迎える。「はじめまして　私の赤ちゃん！」それからの成長・発達の様々な変化をつぶさに見つめていったとき　―親から子へ・子から孫へ―と続いて演じられる舞台の何と不思議で興味に満ちていることだろう。

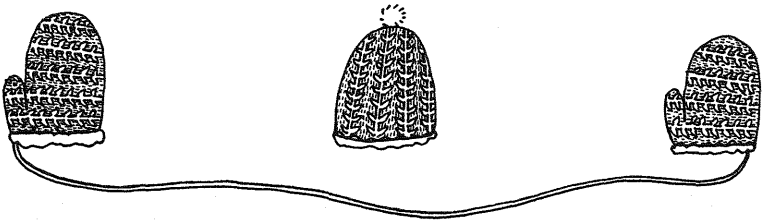
子どもと共に親しく生きる歓びは何物にも代えがたいものである。小さく柔らかくかわいい姿を目にするとき、育てる側はその愛らしさに思わず保護と愛を注がなければいられない心情になる。全身でいのちを託してくる存在を慈しまないではいられないのが親というものなのであろう。しかし、一方では予想を超えた大変さも共にある。赤ちゃんは生きるための主張である、快・不快・欲求を、総て〝泣く〟という行為によってはっきりと示し、周囲の者は否応なく手を下さざるを得ない状況に置かれる。特に、初めて母親になったとき、次から次に出てくる未経験からの数々の困難さに不安は尽きない。子育てには正しい経験に裏打ちされた智恵と、きめこまかい洞察が何よりも必要であり、周囲の人々の温かい支えと援助がなければ、とても日常生活を快く乗り越えることはできない。とりわ



け新しい父親の取るべき態度をはじめ、祖父母その他の温かい協力体制が、乳児期の子どもにとって望ましく嬉しい環境なのであることは、今更強調されるまでもない。

目と目を見合わせ、優しく語りかけ、気持ちを理解して快い状態にしてくれる親。だっこは体温を伝え合い、ゆったりとゆらす動きは胎内での安らかさと同じなのかもしれない。独特の甘酸っぱい匂いをさせて、柔らかく儚いながら、それでいて腕と胸にずっしりと存在を感じさせる赤ちゃん。身をもって交わされる母と子の肌と心のこまやかで濃い接触は、互いに結ばれ紡がれて強い絆となる。この応答しあう交流は両者の間に、いつしか響きあう共鳴を生みだし無意識のうちに確かめられて、「人は信じられるもの＝いのち預けるに足るもの」という信頼関係の基が築かれていくのである。成長してから幼い頃の記憶をしっかりもっている人は殆どいないといってよい。しかし、記憶に無いということは全く消されて何の痕跡も残さないということではなく、じっと心の奥にひそめられたまま、その人間をどこかで、いつか支配するような結果を生むとしたら……。

このごろ、子どものまなざしが少し変わってきているのではないかと感じることがある。いままでは子どもとフト目が合ったとき、こちらのまなざしに対して親しげな反応を示し、言葉は無くても、快い交歓のひとときをもつことが多かったように思う。所謂〝ひとみしり〟からの拒否反応に合うことはあっても、腕をしっかり母親に抱きつけながら、また、そろそろとこちらを窺っているかわいいしぐさがあった。しかし最近一部の子ども



の目は、こちらのさりげないまなざしに、疑いのある警戒の色を示し、交流を避けようとする場面に遭遇することがある。考えられないような事件が次々と起こり、人を無条件に信じることの危険が子どもや親をおびやかす社会の変化がそうさせるとはいえ、人間形成の根幹にあるべき信頼関係の確立の時期に、まず人を疑うことを優先させなければならないのは何としても悲しいことである。また、虐待やネグレクト事件の報道の中に、淋しい幼児体験の世代間連鎖のような背景が見え隠れするのは、より良い育ちを願うのが保育の原点と信じる者にとっては一層つらいことでもある。

勿論、子育てをしっかりしているすてきなお母さんとの出会いもある。いつのまにか、子育ての二極化が徐々に進んでいるのだろうか。

誰もが子どもの幸せを願い、願いは時に祈りに近いものになる。一度しか与えられず、かけがえの無いそれぞれの一生を悔いなく存分に生かしめるためには、幼いいのちへの慈愛のかけかた如何にかかっている。時代や社会が変わってもこの願いは変わらない筈であるし、変わってはならないものなのである。

日本の幼稚園教育百三十年を迎える今、いつも一貫して流れてきたものは、子どもの良き育ちを願い祈りをこめて創意工夫をこらし、日々の保育に力を傾けてきた先達の尊い精神であり、この長い道はこれからも尚きり拓かれていく道なのである。

（保育を深めていく会代表）

特集〈日本の幼稚園教育百三十周年を迎えて〉

# 手引書『幼稚園（をさなごのその）』の原書とその入手経路について

大戸　美也子

東京女子師範学校附属幼稚園の開園に先立つ、一八七六（明治九）年一月、『幼稚園』巻上が出版された。ずばり『幼稚園』と表記したわが国最初の幼稚園教育の手引書である。翌年三月には巻中が、さらに一年後の明治十一年六月には巻下が刊行され、四人の訳者が二年余の歳月をかけて翻訳を完了させている。本書の内容は、幼稚園の創設者F・フレーベルが開発した教育玩具である恩物と手技の取り扱い方を記したいわゆるマニュアルブックであるが、幼稚園教育をスタートさせる直前の出版であったことを考えるなら、倉橋惣三らが本書を「幼稚園史にとって最も意義深い参考保育書の第一である」（倉

橋・新庄、昭和九）と位置づけるのも納得できることである。これだけ重要な保育書であったから、これまで原書の調べから始まって、翻訳者の検討（小林、一九九七）そして原書と照合しての内容の吟味（岡田、一九九七）等々、様々な検討が行われてきた。

しかしながら、原著者のロンゲ夫妻について、また明治初期における教育専門書の入手経路については、まだ充分に解明されていないところから、本論において若干の補足を試みてみたい。

## 一　原著者　ロンゲ夫妻について

『幼稚園』の原著者は、Yohannes Ronge（1813～75）とBertha Ronge（1818～1863）夫妻である。夫ヨハネスは、シレジア生まれの神父で、「十九世紀のルター」と称されたドイツ・カトリック教会の改革運動のリーダーであり、フランクフルト国民会議の議員でもあった（Ronge, 1846）。一方、妻ベータはハンブルク市の富裕な実業家マイヤー家の出身で、既に六人の子どもをもつ既婚者ながらハンブルクの婦人同盟（Ladies' Unions）の熱心な会員として、貧しい家庭の子どもたちの保護や少女の教育にあたっていた。

当時のベータは、新教との交流を訴え、見合い結婚に反対を唱え、女性の教育や自己決定の推進を謳う革新的なドイツ・カトリックに心惹かれ、また新興の幼稚園教育がこうした民主的な考えをもつ人間形成に役立つという期待を高めていた（Read, 2003）。そこでハンブルクの婦人同盟は、一八四九年から五〇年の冬季に最晩年のフレーベルをハンブルクに招き、半年間の幼稚園講習会を開講することになった。受講生二十二名の中には、ヨハネスもおり「幼稚園の基本的な考えは、われわれの教育の考え方と同じ」（Ronge, 1852）という思いを強めていた。同志的な思考をもつ二人の関係は深まり、ベータは遂

に離婚を決意し、夫トラウンに年長の子ども三人を託し、一八五〇年の暮れ、幼い子ども三人を連れてヨハネスと共にイギリスへ旅立つのであった。

翌年、二人の間に子どもができたのを機にドイツからの革新的な考えをもつ移民の多い彼らの居住地で幼稚園を始めた。これが、イギリスにおける最初の幼稚園である。一八五三年には市中に近いタビストックに移転し七歳以上の子どもの教育をも含めた幼稚園教育を展開した。こうした彼らの努力も、当初知る人は少なかったが、一八五四年の教育博覧会への参加をきっかけに彼らの教育活動はイギリス教育界に広く知られ受け入れられていくこととなった。

この博覧会は、一八五一年のロンドン大博覧会の剰余金を基金に技芸協会創立百周年記念事業として、「教育への深い関心を喚起するために、内外の様々な教育機関で採用している多様な教材・教具をできるだけ完全な形で収集し展示する目的で開催」された(大戸、一九八七)。具体的には展示と講演会で構成され、ロンゲ夫妻はその二つに参加したのである。ベータ夫人の「Infant Training(幼児教育)」についての講演は非常な好評を博して、その講演をもとに翌年出版されたのが『幼稚園』の原書である。

書名は次のように長々しい。*A Practical Guide of The English Kindergarten (Children's Garden), for the use of Mothers, Governesses, and Infant Teachers: being an Exposition of Froebel's System of Infant Training*. *London: J.S. Holdson, 1855*

この本は、その後出版社を換えながらも一八九〇年代まで版を重ねてシュタイガー社を介して世界に広まり、遥か日本にまで到来するのである。

## 二　図書取次業者 E．シュタイガーについて

小学校教育さえ普及していない、従って就学前の教育など思いもよらぬ時代に、その教育情報を世界に広めるためには、強力な情報発信者が必要である。幼稚園教育の普及発展のために、情報を発信続けたのがドイツ生まれのアメリカの図書出版・教材製造・販売業者のE．シュタイガー（1832-1917）である。彼は、十六歳から八十五歳で亡くなるまでの七十年間、図書の収集と目録作り、そして出版と販売に捧げた人物である（Arndt, 1979）。十六歳から七年間をドイツの書店で徒弟奉公し、二十三歳の時ニューヨークの書店の助手に転出し、三十二歳（1864）でドイツ語専門の書店主として独立した。彼の名前を高めたのは、ウィーン万国博覧会（1872）にアメリカ合衆国全土（三十七州と十一準州）で発行されている雑誌の総目録を作成し、現物と共に出展した功によりメリット賞を受賞してからである。

一八七〇年代に入り、アメリカ合衆国の各地に幼稚園が設立され始めると、シュタイガー社は急速に幼稚園教育へのかかわりを深め、関係図書や恩物のカタログ作りと宣伝広告を活発化させていく。特に、一八七六年にフィラデルフィアで開かれた万国博覧会では、国内外の幼稚園関係の専門書二百余冊を網羅した図書目録（八頁）と著名な書物の一部を抜粋した小冊子（Tract）、そして恩物と手技の絵入りの商品目録の作成と無料配布、幼稚園関係の教材などの展示、更にはパビリオン内に幼稚園舎を付設して公開保育を実施するなど、幼稚園教育の普及と恩物の世界的販路を広げる絶好の機会とした（大

戸、一九九六）。

シュタイガー社が、幼稚園をはじめとする教育関係の専門書籍販売業者の最大手として急成長していくその時期は、わが国にあっては明治維新の直後に当たり「追いつけ、追い越せ」とばかりにアメリカへも多くの知識人が訪れ、外交をはじめとする各種の折衝をしたり、留学生を送って多方面の情報収集をしていた時期である。このような時代背景を考えると、情報の強力な送り手としてのシュタイガー社と、情報を求めてやまない日本人とは、必然的に接点をもつ状況にあったといえよう。その接点にあってシュタイガー氏と交流していたことを裏付けているのは、森有礼である。

## 三　外国文献の取次ぎ者
## 森有礼と清水卯三郎について

森有礼は、一八六五年から六八年まで、動乱の幕末をイギリスとアメリカで留学し、一八七〇（明治三）年、少弁務使（のち代理公使）としてワシントンに勤務。一八七二（明治五）年、明治新政府が文明視察のために送った岩倉使節団一行をワシントンで迎え、彼らの世話役にあたった。一八七三年に帰国するまで、「日本における宗教の自由」「日本における教育」などの著書を英文で発表したり、全米教育協会（NEA）で講演するなど、彼の活動はアメリカの教育界の関心を集めていた。

森は、またワシントン駐留中、幼稚園に関心をもち、ワシントン近郊の幼稚園教員Miss Hooperに日本での幼稚園の開設を依頼したが、これを解消したことを伝える書簡も明らかにされており、一八七三年以前に幼稚園の存在を知っていたことになる（大戸、一九八二）。更には、一八七三年三月の帰国直前までのシュタイガー社との交信を立証する（二月二十八日　阿久根資料、一九八二・三月十四日　森

有礼書簡集、一九七二）書簡も残されており、森がシュタイガー社の豊富なカタログを入手する重要な窓口になりえたことがわかる。

彼はまた、帰国するや外国生活の経験のある者や洋学の知識豊かな仲間を集め、「我国ノ教育ヲ進メンガ為二有志ノ徒会同シテ其ノ手段ヲ商議スルニ在リ。又同志集会シテ知ヲ広メ識ヲ明ニスル二アリ」を目的とする明六社を結成。定期的に会合をもっては教育や学術・文化について意見交換を行ったのであるから、シュタイガー社からの新情報や図書目録は森を通して当然社員に紹介されたといえよう。

社員には後に東京女子師範学校の摂理に就任する中村正直、また洋書輸入業の瑞穂屋を営む清水卯三郎などがいたことを考えると、シュタイガー社の幼稚園に関するカタログは、東京女子師範学校長中村正直を通して附属幼稚園の関係者に伝えられ、瑞穂屋を介して商品を入手する経路が明治七年当時、すでに確立していたとみることができる。初代附属幼稚園長の関信三はその著『幼稚園創立法』（一八七八・明治十一年）の中でシュタイガー社の紹介と同社発行の図書目録（一八七七年版）に挙がっている二十七冊を「参観ノ便ニ供ス」と紹介しているが、このカタログには、勿論『幼稚園』の原書は含まれていた。

これまで示してきた事実を辿れば、遠くイギリスで出版されたロンゲ夫妻の原書がアメリカを経由し、外国事情に明るい森有礼や中村正直などの啓蒙的な教育界のリーダーを介して関係者にもたらされ、わが国最初の幼稚園の手引書の役割を果たしたということが炙り出される。遥かに遠い道のりを経て、国際的な連携の中で、わが国の幼稚園は出発できたのである。

（お茶の水女子大学）

# 日本における幼稚園教育の確立
## ―保育会の果たした役割―

湯川　嘉津美

### はじめに

日本の幼稚園は、一八七六（明治九）年創設の東京女子師範学校附属幼稚園をもって嚆矢（こうし）とし、今年で百三十周年を迎える。この幼稚園の歴史を振り返って思うことは、とくにその前半の七〇年間は幼稚園は積極的な教育政策の対象とはならず、有効な幼稚園振興策は何一つ打ち出されなかったことである。幼稚園教育を支えたのは親と幼稚園関係者たちであり、そうした中で、幼稚園数は一八九五（明治二十八）年に二百を超え、その後、一九二〇（大正九）年に七二八園、一九三〇（昭和五）年には一、五〇九園にまで増加した。この間、一八九九年に「幼稚園保育及設備規程」、一九二六年には「幼稚園令」が制定されて、幼稚園制度は整えられるが、そこには、幼稚園関係者たちの粘り強い働きかけと、幼稚園教育の質的向上に向けた真摯な取り組みがあったのである。そうした働きかけなしには何ごとも成し得なかったといっても過言ではない。

そこで本稿では、幼稚園教育の確立に、幼稚園関

係者が組織した保育会や協議会などがいかなる役割を果たしたのか、歴史を振り返りながらみてみることとしたい。

## 一　フレーベル会の結成と幼稚園改善要求

一八九〇年代に幼稚園は各地で急速に増加した。それに伴い、保育研究団体も結成されるようになり、一八九六(明治二十九)年にフレーベル会（一九一八年に日本幼稚園協会と改称）、翌年には京阪神聯合保育会といった全国的な研究団体が組織された。これらの団体は保育内容・方法の研究改良はもちろんのこと、教育制度上、明確な位置づけのない幼稚園の制度的改善を当局に要求していった。そうした中で、文部省も幼稚園に関する規程制定の必要を認め、一八九九年に文部省令第三十二号「幼稚園保育及設備規程」を公布した。しかし、その趣旨は幼稚園の設立を奨励しようとするものではなく、逆に増加を続ける幼稚園に対して、規程を設けて幼稚園の編制や設備面で条件をつけ、その安易な設置を防ごうとするものであったのである。

こうした文部省の消極姿勢に対して、フレーベル会は、さらに一九〇五（明治三十八）年と一九〇八（明治四十一）年の二度にわたり、文部省に幼稚園制度の整備を求める建議を行った。一九〇八年の建議についていえば、そこには幼稚園規程の改正案や幼稚園教育のあり方に関する訓令案も提示されており、注目される。

幼稚園規程の改正案では、幼稚園の目的について、「幼児を保育するには其日常の遊嬉を指導して心身を健全に発達せしめ、善良なる習慣を得しむるを以て本旨とす」と、幼稚園教育は「遊び」を通して指導するものであることが明確に打ち出されている。そして、保育内容についても「保育に要する遊嬉を観察、模倣、唱歌、談話、運動、手技、作業等とす」として、遊びの中に観察以下の項目を含めて位置づけるのであった。ちなみに、「観察」はこ

の建議において初めて保育内容として提示されたもので、自然や社会の観察経験を通して幼児の事物への興味を促進し、観察力や注意力を養成しようとしたのである。

また、幼稚園教育のあり方に関する建議では、世間の幼稚園や遊びに対する解釈の誤りを指摘しつつ、遊びによる保育のあり方を示した。すなわち、遊びによる保育とは、遊びを通して何かを教えようとするものではない。世間では科学的事項や道徳も遊びを通してならば教えてもよい、と考える向きがあるが、教授のために遊びを利用するのは幼稚園の本旨から外れるものだ、という。そして、そもそも遊びは幼児本来の性質に基づく自発活動であり、のちの人生に必要な諸活動の萌芽はすべて遊びの中にあるとして、幼児期の自発的な遊びの重要性を主張するのであった。

一般に、明治期の幼稚園教育は恩物中心の形式的な保育に傾斜していたと考えられているが、フレーベル会がこうした「遊び」認識のもとに、幼稚園における「遊び」による保育のあり方を明確に打ち出していたことは注目に値しよう。

## 二　保育界における幼稚園改革構想

大正期に入ると、全国規模の保育研究大会もたびたび開催されるようになり、幼稚園の制度的確立を求める声はさらに強いものとなっていった。そうした中で、一九二五（大正十四）年六月、全国から四十九名の代表者を集めて「全国保育者代表協議会」が開催された。そして文部省の幼稚園令制定の参考に供するため、それまでの保育界の要求事項が整理され、最終合意案ともいうべき「幼稚園令内容案」が審議・作成されたのである。

まず、幼稚園の目的についてみれば、「幼稚園は幼児を教育するを目的とする。幼児の教育は幼児の

生活を尊重し、心身を健全に発達せしめ、順良なる性情を涵養すること」とされた。ここでは従来の「保育」の語に代わって「教育」の語が用いられたが、それは幼稚園が小学校と同様に国民の基礎教育を担う重要な教育機関であることを人々に認識させるには、「保育」よりも小学校以上で用いられる「教育」という語を使用する方がよいと考えられたからである。また、「保姆」という名称についても、これを「幼稚園教員」に改称して、男子にも資格を与えること、幼稚園教員を正・准の二種に分けて、幼稚園正教員の資格・待遇を小学校の正教員と同等とすることが求められた。

「幼稚園教育要項」については、倉橋惣三より提出された参考案「幼児を教育するには遊戯を本体とし、幼児に適当なる実際生活、製作、文学、美術、音楽を以てし、又自然界社会生活に対する観察をなさしむ」をもとに協議が行われた。その結果、「幼児を教育するには遊びの生活を本体とし、幼児に適当なる実際生活、芸術生活、及び運動遊戯を以てし又自然界及社会生活の直観をなさしむ」の文言をもって本文とし、それに次のような趣旨説明を付すことで合意がなされた。「幼児教育要項は従来遊戯、談話、唱歌、手技の四に限定されてあるけれども、これでは幼児の遊びの生活を全体として指導するのには不十分の点がないでもないから、常に幼児に適当な実際生活、芸術生活及び運動遊戯等から自然界及び社会生活の観察等を以てその内容とする。……けれども、これらは分科としての要目ではない。常に具体的な幼児の生活を指導することを主とする。それゆえひとつの遊びをとって見ると前記各方面の種々の内容を包含して居る」。

こうして、協議会の場では、それまでの保育四項目の発想を脱して、幼児の教育は遊びの生活を本体とし、具体的な幼児生活の指導を中心として行うものであるとの立場が鮮明に打ち出されたのであった。この「幼稚園教育要項」の内容は、今日の「幼

稚園教育要領」および「領域」の考え方に近く、それが大正期に保育界の総意として示されたことの意味は大きいといえよう。

さらに、協議会では託児所との関係についても議論がなされ、「託児所に於ても満三歳以上の幼児十名以上を集めて教育するときは本令によりて幼稚園として取り扱ふ」ことが示された。託児所にも幼稚園令を適用して、その質的向上を図り、もって三歳以上の幼保の一元化を進めようとしたのである。

以上のように、全国保育者代表協議会において審議・作成された「幼稚園令内容案」は、教育内容の改善と幼稚園教員の資格の向上によって、幼稚園教育の質的向上を図り、もって幼稚園を学校教育の系統中に位置づけようとするものであり、そこには小学校教育とは異なる幼稚園教育の特色を示した目的規定や幼稚園カリキュラムの提示、小学校教員と同等の幼稚園教員の資格・待遇規定、三歳以上の幼保の一元化の提案など、この時期の保育界における幼稚園改革構想が具体的に示されていたのであった。

一九二六（大正十五）年、幼稚園令が発布された。幼稚園令は保育界の長年にわたる要求運動の成果であり、幼稚園関係者に大きな喜びをもって迎えられたことはいうまでもない。しかし、それは必ずしも幼稚園関係者の要求を満たすものではなく、保姆の資格・待遇は小学校教員よりも一段低いものにとどめられ、「幼稚園教員」への名称変更や、男子への門戸開放も認められなかった。保育内容についても、従来の四項目に「観察、等」が付加されたにすぎなかった。幼稚園令は幼児教育史上、幼稚園制度を確立させたものとしてその意義が高く評価されるが、実際には幼稚園関係者たちの幼稚園認識の方が一歩も二歩も進んでおり、その内容は、戦後の幼児教育改革の方向とも一致するものであったのである。

## おわりに

戦後の幼児教育改革によって、幼稚園は「学校教

育法」の中で学校体系の一環に位置づけられた。幼稚園制度の整備と幼稚園振興策によって、幼稚園の就園率は高まり、一九七五（昭和五十）年には五歳児の就園率は六〇パーセントを超えるまでになった。戦後の幼稚園の発展は目覚ましく、今さら戦前の幼稚園教育を振り返っても見るべきものはない、といわれるかも知れない。しかし、一九〇八年のフレーベル会の建議内容や一九二五年の全国保育者代表協議会が作成した「幼稚園令内容案」などを見ると、幼稚園における遊びの捉え方、幼児の教育は遊びの生活を本体とし、具体的な幼児生活の指導を中心として行うものであるとの立場の表明など、そこには今日にも通じる幼児教育の根本が鮮明に示されていることに気づく。

戦前の保育界をリードした倉橋惣三は、一九五五年に亡くなる直前、『幼児の教育』（五十四巻一号）に「新しき年を迎えるにあたって」と題する小論を寄せ、その冒頭で幼稚園関係者に向けて次のように問うた。「根本考察が足りない。根本考察が足りないから、問題がいつでも枝葉のところで動いている。……時の経過はなにほどかずつの進歩を積み上げていくには相違ない。しかしその進歩は、あまりに気まぐれな、無秩序な、断片的な集積にすぎないものであって、そこに何等の系統的組織的進歩というものを見ない」と。八十年、百年前の幼稚園関係者たちの幼稚園教育に寄せた思いを顧みながら、一体、私たちはどれほどの進歩を遂げただろうかと思う。倉橋が残した「根本考察」の意味をかみしめながら、混迷を極める今日の現状に対して、考えをめぐらせてみることも必要であろう。

（上智大学）

**参考文献**

湯川嘉津美「大正期における幼稚園発達構想」『上智大学教育学論集』三十一号　一九九七年

# 引き継ぐ覚悟

松井　とし

昨年のお茶の水女子大学創立百三十周年に続き、今秋、附属幼稚園が創立百三十周年の記念の時を迎える。前年の女子高等師範学校創設に続き、当時、国はまず附属幼稚園を、その二年後に附属小学校を設置している。最近、幼稚園と小学校の連携の必要性が広く認識されるようになり、ボトムアップの教育が注目されるようになったものの、なかなか理解を得られない実情を考えると当時の関係者の先見性に敬意を表さずにはいられない。

東京湯島で産声をあげた附属幼稚園は、関東大震災後の仮園舎時代を経て、一九三二年に女子高等師範と共に、ここ大塚二丁目に移転してきた。以来七四年、耐震性はもとより当時の建築の粋を集めた園舎は、大きな改修を行うことなく今なお現役の役割を果たしている。多くの子どもたちがこの園舎と園庭で、それぞれこだわりをもって日々の生活を繰り広

げ、巣立っていく。

玄関から突き当たり奥の遊戯室までひと筋に続く長い廊下、高い天井、「森」や「海」など各保育室のクラス名を表すステンドグラスは、この建物の象徴となっている。ステンドグラスの制作者は不明だが、壊れたら復元は難しいとされている。せめて映像による資料を後世に残しておくことの責務を痛感し、このたび凸版印刷に本格的な撮影を依頼した。

長く広い廊下はもとより、柱が一本も使われていない遊戯室、各保育室の床材は厚いムク材が使われており、今後もまだまだ削って修理することができる、とのことだ。しかし、水の使用頻度の高い各保育室の手洗い場の床はさすがに朽ち果て、既に創立当時とは質の違う現代の木材で修理されている。また、床下のスチームの蒸気漏れが原因で、床のところどころが、盛り上がってしまっている。床下のスチーム漏れは全面的な配管の取り替えが必要であるということになり、今春大々的な工事が行われた。今後もこの歴史的な建造物の維持には、単なる修理ではなく、質にこだわり復元というコンセプトで臨んでいかなければならない、と考えている。

この幼稚園の環境の大きな特色は園庭である。多くの幼稚園の園庭がグラウンドであるのに対し高低差のある上下の空間で構成されている。上の空間を私共は「おやま」と呼んでいるが、そこには幹周り六メートルの大銀杏が枝を広げ、四季折り折りの環境をなしている。春の初めの枝々には小さな芽が一斉に出初め、あっという間に大きな新緑をなし、秋には黄金色に輝き、やがて全ての葉は散っていく。子どもたちは一年中、銀杏に抱かれるように遊び、時にはシートを敷いてお弁当を食べる。落葉の時期には金色の落ち葉を巻き上げ、まるで銀杏の精のように興ずる姿も見られる。

「おやま」の上と下は何本かの小径により繋がっており、回遊することができる園庭である。ある時、おやまへ続く小径で五歳児のハンググライダーの実験が行われたことがあった。この時の情景は今も私たちの心に焼き付いている。一人の男児が試行錯誤

した自作のハンググライダーを背負い坂道を走り下りることを繰り返した。周りには同じクラスの友達の他、三歳児の子どもたちや担任も取り囲み大騒ぎであった。そのうち室内にいた担任の所へ仲間の男児が息せき切って「せんせい！　うちわ貸して！　たくさん！　もっとたくさん」と言いに来た。担任が急いで数本のうちわを手渡すと、男児は踵を返し走っていった。そして坂道を走り下りる男児をみんなで一斉に扇いだ。ハンググライダーを背負ったその男児は「からだがふわっと浮いた」と実感し、周りの子どもたちも口々に「確かに飛んだ」と言い、そこに居たみなが納得したのだった。運動会の前後から冬場にかけては子どもたちの「やま周りマラソン」が盛んになる。

「おやま」の奥には、大学附属の零歳児から三歳児までの乳児が生活する「いずみナーサリー」の出入り口があり、乳児と幼児がごく自然にかかわり合う場面も多くなった。大学の生活科学部発達臨床心理学講座を中心に「幼保の発達を見通したカリキュラム開発プロジェクト」が組織され、乳児の発達研究が始まった。質の高い乳児保育のあり方、二歳児と三歳児の接続について等、今後の研究の成果が期待されている。

斜面の木々の間には水道栓が密かに配置され、まるで山から清水が湧き出てくるかのようだ。毎年夏の気配を感ずると、年長児を中心にデッキブラシで川の掃除を始める。斜面の下に作られている玉石を配置した川の中で、水に触れて遊んでいるうちに思わず被っていたカラー帽子を洗濯し始め、手近な木の枝に干す子どもたちの後ろ姿が微笑ましい。このような人間の本能ともいえるような感性を発揮する場は、もはや幼稚園にしかないのかも知れない。

このたび旧い写真を見直して驚いたのだが、移転当時の一九三三年には斜面に桜は植えられているもののほとんど芝生で覆われており、この園庭が造園されたものであることが明らかになった。それにしても、もし幼稚園が現在地と反対の護国寺側の平坦な地に位置していたら、現在とは全く異なる風情で

あったろう。茗荷谷の地形を活かし、上下二段の園庭を造った先人のセンスは驚くばかりである。子どもにこそ本物を、上質な物を、という理念が貫かれている。

さらに一九三七年の世界教育会議の時に作られた写真集を見ると、園舎の外観、川の辺り、バラの東屋の辺りは現在とほとんど変わっていない。園庭中央の桜の老木も枝振りからして当時からかなりの大木だったように思われる。桜はここ数年勢いがなくなり、二年前に延命措置を施した。今は空に向かって高くそびえている玄関脇のヒマラヤ杉は屋根の高さと同じくらいに写っている。

ある時、五歳児の女の子が「のんびりできるところを教えようか」と話しかけてきた。後からついて行くと、そこは「おやま」の上に建つ小さなログハウスだった。屋根の上に座って、護国寺方面の空を眺めると「のんびりできる」と言うのだった。二人で青い空を見ながら「幼稚園こそ子どもがのんびりできるところでなければならない。それにしても、ここが東京のほぼ中心部に位置する文京区とは思えない」と感じ入ったことだった。

長く広い廊下を四歳男児が下を向いて、一歩一歩踏みしめるようにこちらへ向かってくる。すれ違った私は思わず「A君何を考えているの？」と声をかけた。彼はしばらく歩を進めてから振り返り、毅然と「誰と遊ぶか」と言った。友達との諍いの後だったかも知れない。長い廊下を歩くことは自分と向き合いながら、気持ちを落ち着かせ、考えをまとめる大事な時間だったのだろうか。

また、広い廊下は子どもたちにとって格好の遊びの場だ。いろいろなお店を出して作った物を売ったり、ござや積み木を組み合わせてままごとの場としたり美容院や図書館を開いたり、いつも賑わっている。このような環境により異年齢交流がごく自然な形で行われ、現在の保育の特色をなしている。入園当初の三歳児を支える五歳児のかいがいしい姿もその一例である。入園式の日、五歳児は三歳児の手をつなぎ長い廊下を共に歩き遊戯室へ誘導する。次の

日からも小さい人のお世話がしたい子どもたちは、降園時の支度を手伝ったり、歌を歌って聞かせたり、三歳児が幼稚園に馴れ親しんでいくことができるようさりげなくかかわる。大きくなった自分を感じつつ、自分が役に立っている自己肯定感に満ちているのだろう。子どもたちの横顔は真剣で且つ晴れやかだ。この五歳児（時には四歳児も）のお手伝いを支えているのは、三歳児の子どのたちの保育をしつつ、実は五歳児をも受け入れている三歳児の担任である。学年を超えた担任同士の信頼関係があればこそ実現するチームティーチングである。

私共は、子どもたち一人ひとりが自分でやりたいことを見つけ、存分に遊び、遊びの中に学びを見いだすことができるように環境を整える。そのために教師は子どもたちとの信頼関係を丁寧に積み重ね、その絆を基盤に彼等の主体性を支え、共に日々の生活を創っていく。たとえ一日の生活の中で心がくじけることがあったとしても、降園する時には「今日来てよかった」と思うことができるような一日を保障したい。

この保育理念はずっと長い間引き継がれてきたが、最近の都市化、核家族化などの社会環境の変化を受けて育ってきた最近の子どもたちにこそ必要な理念であろう。子どもたちの生活を教師の指導計画にはめ込んでいくことはしない。しかし子どもたちの入園までの経験の差が大きくなってきており、教師は一人ひとりの発達の過程をとらえ、見通しをもたなければならない。その上でその子どもに合った言葉をかけ、子どものイメージの実現のための援助をする。行きつ戻りつする子どもたちの発達の状況を的確に捉えつつ、三歳児から一人ひとりの心の安定を基盤に、遊びの充実にかかわり支え続ける。遊びや友達関係が広がる四歳児を経て、五歳児になると「ともだち」の分野を「なかま」と捉える。子どもたち一人ひとりのよさやアイデアが響き合い、協働的な姿勢が生み出されるよう、教師には人と活動をつなげていく役割が求

められる。自らが日々新鮮に、柔軟な心とからだで楽しみ、子どもにとって意味ある生活を保障しなければならない。

子どもたちを取り巻く環境は大きく変わってきている。子どもの周りには危険がいっぱいで、天災だけではなく、不審者対策の訓練も必須となった。安全に関する事項は学校評価の最優先の課題である。二〇〇三年度末には小学校から幼稚園の周囲にぐるりとフェンスが設置された。保護者も自発的に地域の安全パトロールのボランティアを始めている。

時代が変わり仕事をもつ母親が多くなった。しかし、以前のように祖父母が迎えに来て降園後は家庭で共に過ごす事例は少なくなり、保護者と契約した人が迎えに来て、降園後は別の集団で二重保育を受ける子どもが増えている。子どもにとって幼稚園の生活と家庭の生活は密接に繋がり連続しているので、その心身の負担は大きい。しかしこれが現実だ。幼稚園の保育を単なるサービスと考える保護者も増えてきている。「もっと長く預かって欲しい」「研究会でお弁当がある日が短縮になったら、他の日に補って欲しい」などの要望が保護者アンケートに寄せられる。一方「入園前は昼寝はしなかったのに、最近は帰宅すると昼食もそこそこに寝てしまう。親子で遊ぶ日に参加し、幼稚園の短い時間が子どもにとってどれほど密度の濃い時間であるかわかった」と気付いてくださる保護者もいる。

多様な価値観が氾濫する中、幼稚園に課せられている課題は、子どもと共に保護者を支えることである。保護者参加の機会を増やし、その幼児理解を育成する。一方、いつの時代も子どもたちの真の幸せを願う専門家として、子どもたちの代弁者として、質の高い保育実践を通して幼児期の教育の本質をきちんと発信し続けていかなければならない。

社会の変化を捉え、課題を明確にし、百三十一年目を引き継ぐには、教師の自覚と自己研鑽、絶えざる「研究」は欠くことのできない条件である。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

＊＊＊＊＊ 幼稚園百三十年記念企画　アーカイブズ『幼児の教育』(4) ＊＊＊＊＊

お茶の水女子大学附属幼稚園が設立されて百三十周年を迎えた。また、本誌『幼児の教育』は、同幼稚園を本拠地として一九〇一（明治三十四）年に創刊されてから百五年目となる。わが国最初の官立幼稚園の使命をにない、日本の幼児教育学の礎を開拓した東基吉、和田実、倉橋惣三をはじめとする戦前の研究者および幼稚園の「保姆」（戦前は幼稚園・保育所を問わず、保育者をこう呼んだ）たちは、お茶の水の地から、この雑誌を通して、日本の幼稚園教育の理論や方法を世に問い、全国に発信したのだった。

今年はそれを意識して、本誌『幼児の教育』の戦前の記事を折りにふれて「アーカイブズ」として掲載してきた。特集号の今回は、一九二七（昭和二）年第二十七巻　第三号において、幼稚園五十周年を記念して掲載された「創立当時の状況」に関する記事を転載する。

（読者に読みやすいように、一部、仮名・漢字遣い等を改めた。編集部）

# 幼稚園創立の當時

氏　原　鋹　子

今のお茶の水の幼稚園が五十年の昔創立せられた時が、我國に於ける幼稚園教育史の貴い初めのペーヂであることは申すまでもありません。その當時の記憶が如何に重要なる資料であるか、また如何に興味深いものであるかも申すまでもありません。ただ、その貴重な記憶を目のあたり辿り得る人は、今日に於て既に多くありません。茲に、氏原鋹子女史に特に懇請して、こ

の御執筆を煩はし得たことは非常なる幸であります。氏原女史は我國幼稚園の昔を語り得る最も古い先輩であるのみならず、我國幼稚園教育の學生のために偉大なる貢献者として、私共の常に尊敬して居る方であります。大阪市江戸堀幼稚園長として、我國幼稚園功勞者として、諸君御熟知の膳眞規子女史の姉上に當られ、現に氏原醫學博士母堂として、お孫さん方の間に慈み多い、最も幸福なるお祖母様でいらっしゃいます。吾々は、氏原女史を思ひ、膳女史を思ふ時、我國幼稚園發達史上、恐らく最も光輝ある記録の一つなるべき、此の「姉妹の功勞者」を、無限の尊敬を以て思はざるを得ないのであります。

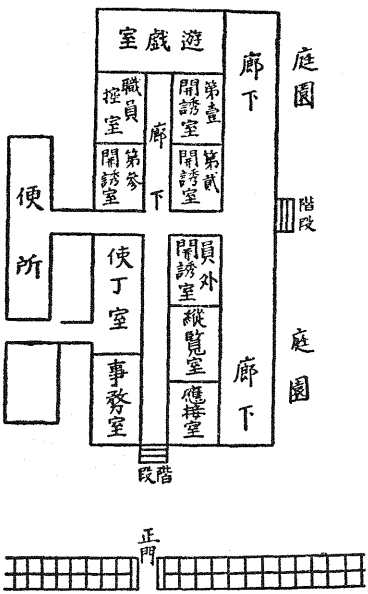
（編者）

# 東京女子師範學校附屬幼稚園創立當時の狀況（現東京女子高等師範學校の前身）

明治九年（月日不詳）現今の場所御茶の水に東京女子師範學校附屬幼稚園を創立せらる、當時職員摂理（校長）中村敬宇、幹事　関信三、首席保姆　松野クララ（獨乙人）、保姆　豊田芙雄、保姆　近藤濱、助手　山田某、助手　大塚某（の五名直接保育者）後本田保育傳習済横川楳子保姆となる、事務員二名、使丁女二人男一人。

園舎、洋館にて北向き、南に伸したる長方形にして、正門北にあり、順天堂醫院と向ひ合ふ。現今は敷地湯島電車通りに出て角を引き廻はされ居るも創立當時此の一角は町商家ありたり、

當時園舎の略圖



此の洋館の立派なるに比し外園は丸太の柵なりし、或時幼兒の柵間に顔を出し往來を見て居りしに其頭丸太間に挾まり容易に拔くこと出來ず大騒したることありし。園舎の床は高く、地下室に大暖房を設け之より各室に鉄管を通し温度を送る装置なるも、其構造に不十分なる点あり其用をなさざりし。

庭は廣く西に延び、池藤棚、築山あり、又三尺四方に劃せる幼兒一人用の畑地あり、之れは幼兒をして種子を蒔き、或は野菜草花を培養し、水を灌き草を取り、自然物發生状態の趣味を養ひ此の収穫の豆或は野菜等は自家に持ち歸らしめ、又は園内に於て煮て一同に食せしむることあり、之れが作業用として幼兒用小形の鍬及び手桶柄杓を準備す。

當時保育室を開誘室と稱し、此中員外開誘室と云ふは二年八ヶ月以上満三年迄の幼兒を入れ（附添人と共に）保姆保育せず、助手二名之が保育に當れり、縱覧室は園内の最も美觀を附與する處にて、床上には美しき絨毯を敷き壁間には美麗なる額面を掲げ、衣食住に関する額面は幼兒の趣味深く觀られ又陳列棚あり、之れは幼兒の製品、動植物の標本、諸種の玩具等を陳列し之れが觀玩によりて知識を開くに供し、又此室は來賓室用に使用せり。

此室に掲ぐる衣食住に関する額面は絹地に特に画家の描きたるものにて、版画にあらず。此の通りの額面を大阪府より依頼して製作送られたるもの、現在大阪市東區今橋愛珠幼稚園に掲載してあり、下阪の際は御一覧相成りたし。

保育用具はフレーベル氏製定の恩物を用ひ、樂器は和琴（六絃琴）とピアノ一臺あり、此のピアノは遊戯室に据へ一週二回保姆クララ氏彈じて幼児一同の唱歌に和す。此當時クララ氏の外にピアノを彈く者なし他の保姆之れを彈くことを知らざりし。

幼兒に唱歌を教ふるに手拍子を取り口移しに教へたり、當時我國に於ては未だピアノオルガンの製造出來ず、皆舶來に仰ぐ時代なりし。

唱歌保育用のもの皆無の時代にて現今の如く唱歌書の出版もなく、又音樂學校もなく、依て保姆豊田近藤兩氏作歌して宮内省式部寮雅樂弓員作人に作曲を請ひ、其作人たる芝、林、東儀、奥等の諸氏幼稚園を一週二回教授に來られ、保姆一同之れを習ひ後初めて保育用となすもの、斯様にして自ら作らざれば求むるに道なく随分苦心の時代なりし。

當時唱歌の歌詞は雅言多く其意味は幼兒に解されず、幼兒は唯其旋律の優美なるに快感を有したるものの如し、此時代の唱歌中に其意味のやや幼児に解され、今以て使用せらるる風車水車之れなり、今左に雅言多き唱歌を示し、其二三を擧ぐ。

花　橘　さつきたつけはひもしるく我宿の花橘はほころびけり庭もかほりて。

春日影　百鳥の立ち歸り來てもろ共におのがさまざま鳴きかわす聲面白し大空の色もうららに曇りなき日影あまねし波風の治まれる代の光りあまねし。

父　母　1父母の我行末を朝よひに思ひはかふと嬉しくもさとし玉へるおさなかる我にはあれど。
2いざさらばま心もちて父のみの父をいやまひ母そはの母をかしこみつかへまつらな。

露　霜　つゆしもに梢は色に出でけり衣の袖を吹く風も身にしむ虫の聲すなり驚かれけり年月はなかばをとしも杉のむら立ち。

此の唱歌の作曲は我國古來旋律法により宮商角徵羽（キウシヨウカクチウ）を基礎とし作製せられ調子の名は一越（イチコツ）調双調（ソフヂヨウ）調平（ヒヨフ）調（ヂヨウ）調黄渉（オウシキ）調盤渉（バンシキ）調にして現今の、と調へ調に調と云ふが如し、之れ古來支那より伝來せるもの、此の樂理を今日使用する西洋樂理に對照するに、其原理歸着する所同一にして、東西樂理の一なる奇と云ふべし。保育上必要なる器具恩物の準備に付ては現今の如く幼稚園用の器具恩物の販賣店なく、我國創立の時代なれば一切の見本を獨逸より取り寄せ、本校御用達佐藤と云ふ者に命じ模造せしめたるも、何分初めてのこととて思ふ様に出來ず、度々其欠点を改造せしめ又色紙の如きも獨逸のものは洋紙なれば之れを我國の美濃紙又は西の内に染めさせたるに染め上り十分ならず、保姆諸氏の苦心研究指導の結果漸く適當のものを得る様になりたり、実に此時代の苦心思ふも餘りあり。又豆細工は外國のものは竹を用ひず細く削りたる木を以て大豆に接合して作るに其細木の尖端を小刀にて削り細く尖らして作らざれば出來ざる極不便のものなりしが、近藤保姆の考案により細く削りたる竹に豌豆を以て接合し容易と作り得らるる様なりたること近藤保姆に感謝する次第なり。（大豆の扁平なるに代ふるに円き豌豆を用ひ削り箸に代ふるに細き竹を用

ひたることを）

明治十一年二月始めて保育傳習生を置く、大阪府より森末、氏原鋹、國直接の給費生横川楳の三名（其後続て傳習生数名を出だせり）

明治九年より十一年の間に於て　英照皇太后陛下　昭憲皇后陛下　本校の行啓の時幼稚園へ行啓遊ばされた、此時幼稚園にては風車の遊戯を御覧に入れた、保姆一同浅黄無地甲斐絹一反を下賜せらる、後の行啓の時保姆は先きに拝受の甲斐絹を衣服に仕立着用せり。

昭憲皇后陛下　は本校へ御製を下賜せられる。（行啓の時）

磨かすば玉も鏡も何かせん學びの道もかくこそ有りけれ

右の御製に符を付け本校幼稚共に謹唱せり。（後に於て）

當時の保姆は日本髪を結ひ袴を着用す。（稿地）

参觀人の中外國公使も有りたるが、此中に付き一番鄭重な待遇せしは支那公使にて（名は忘却）従者数名を連れ、（一行十餘名）参觀後縦覧室に於て西洋料理（最上等）饗應をなし、其室内の装飾も立派に小鳥の籠などを提げたり、此來賓の歸りし後其料理の殘品を職員一同に與へられたるに中々殘品とは思はれぬ程の御馳走なりし。

明治十一年新緑の候、幼兒職員一同飛鳥山に遠足を催し、馬車にて行く、此時幼兒は家庭より各附添人

ありたりを以て保姆は責任軽かりし。

以上は記憶思ひ出を記したるも粗漏を免れず、何分明治十二年頃の状況に付之れより以後の事情は他に就て御取調相成度候。

＊　＊　＊

書き手の氏原銀子氏は、東京女子師範学校附属幼稚園設立の二年後の明治十一年に、最初の保育見習い生として配属され、日本幼稚園史に名高い松野、豊田、近藤らわが国初の保姆たちと共に保育に携わった。設立当初の公的な史的事実に加えて、思わず微笑んでしまうようなエピソードも織り込まれている。

幼稚園創設には、時の文部大輔田中不二麿が重要な役割を果たし、先進諸国の幼稚園事情に啓発されながら、①幼稚園の模範を示す②教育の発展を図る③女子師範学校生徒の実習に資する、という三つの目的を掲げた（湯川嘉津美、二〇〇一）。摂理となった中村正直、語学力堪能な関信三という逸材が幼稚園の背景を支えていた。「幼稚園」という名称は、明治五年の学制制定当時は「幼稚小学」だった。しかし、F．フレーベルが一八四〇年にドイツに設立した世界最初の幼稚園Kindergartenの名にちなみ、原語に即して「幼稚園」という名が採用されたのである。フレーベルは、知識注入型の教育モデルを批判して、子どものもつ自然の力をいつくしみ育てる新しい教育のあり方を、植物を育てる園丁になぞらえて「子どもの庭」と命名した。「保育」という言葉は、「附属幼稚園規則」（明治十年）の中において初めて使われるようになったといわれる。幼児教育に関する基本的な用語は、

附属幼稚園と共に開拓されたのである（明治八年に京都に公立の「幼稚遊嬉場」が一足早く実現していたが、開設一年半で廃止された）。

保育方法や内容においても、初期の幼稚園はフレーベルの影響は大きかった。特に、この時代の幼稚園教育内容の典型ともいえる「恩物」という現代の積み木につながる教育玩具は、原理を超えて形式主義的に使用されることが多かった。そのため、後の東基吉や倉橋惣三らによって批判の対象となり、明治末以降の幼児教育理論の発展につながるという展開を招来する。初代主席保姆の松野クララ女史は、ドイツでフレーベル主義の保育者養成教育を受けた人であった。氏原の記録から、当時の幼稚園では恩物だけでなく、池藤棚や畑における植物栽培に力を注いでいた様子がわかり、自然の中で子どもが育つことを重んじたフレーベルの真髄も継承されていることがわかる。

自然豊かで起伏に富んだ園庭は、現在の附属幼稚園でも同様に見られるが、場所は設立当初の「お茶の水」から、現在の大塚（同じ文京区内）に移って七十余年の星霜を経ている。旧園舎は、関東大震災で一九二三（大正十二）年に消失し、この記事が書かれた時期は仮園舎の時代である。地下室に設けられた大暖房がうまく機能しなかったという話は滑稽でもあるが、最初の官立幼稚園建築の重厚さがわかる。ごく一部の上層階級の子弟のための幼稚園であり、やんごとなき方々の行啓の頃には七十五名の園児数であった。玄関前には車回しがあったという。建物の見取り図にある付添い人の控え室や、縦覧室の存在などが、附属幼稚園の特別な性格をしのばせる（明治三十年までに主要都市を中心に園数は急増し、全国二百二十二園となった）。

昭憲皇后陛下に賜ったという「磨かずば」の歌は、現在のお茶の水女子大学の校歌である。

（編集部）

# 働く意欲が持てない？（1）
## ―ニート、フリーター―

〈お茶の水女子大学公開講座「子育てのためのリスク管理論」から〉

耳塚　寛明

### 一　はじめに

今日のテーマは、フリーターとかニートにかかわる若者の就労をめぐる問題です。フリーターとかニート、それから若者の非常に早い離転職の問題などがしばしばメディアなどで取り上げられます。

なぜか、と考えたとき、すぐに頭に浮かぶのが若者の就業・職業意識です。特に職業意識に何がしかの問題があるのではないかと考えます。たとえば「生きることにおいて、職業の意義が低くなっているのではないか」「就業意欲に問題があるのではないか」「職業の達成意欲が低下しているのではないか」というように、彼ら自身にこの現象をもたらした原因があるのではないか、と考えるわけです。政府が打ち出しているニートやフリーターに対する対策も、そういう個々の若者に働きかけるという側面が主流です。

しかし、もう一つ、重要な問題があります。「グローバル経済化の問題である」「非正規雇用と呼ばれるよう

な雇用のされ方、雇用の仕方が増大している」「高学歴代替が起こっている」など、構造的要因といわれるものです。

これは個々の若者の問題というよりも、社会の構造、社会そのものに起因する問題であって、なかなか個々人の努力でその影響を免れることは難しい、といわれているものです。今日は、若者の就業、あるいは職業意識の問題として把握されてきた、このフリーターとかニートの問題を、構造的な要因の観点から考えてみることにウエートを置きます。

ニートは、「雇用されていない」「学校にも職業訓練期間にも在籍をしていない」若者たちを指す言葉です。この言葉が使われだしたのは、実は一昨年からに過ぎません。瞬く間に流行することになり、現代の若者たちの欠陥を告発する言葉になりました。同時にそれは、そのような若者たちを問題視する若年養成機関や教育政策にとっても、最大のターゲットといってよい位置づけを与えられることになりました。

しかし、私はこのニートという言葉は非常に危険な言葉であり、若者に対する非常に危険なまなざしであると考えています。なぜなら、ニートという言葉には、「働く意欲を欠いた引きこもり型」のイメージが付与されてしまったからです。

「働く意欲に欠ける」というふうに、我々日本社会はニートという言葉を理解しました。実は、ニートを直接訳せば、ただ単に「雇用されていない（無業である）」かつ、「教育機関・訓練機関にも在籍していない」という状態を指すだけです。そこには、意欲に欠けるという言葉は直接でてきません。にもかかわらず、日本社会は働く意欲を欠いた若者として、このニートという概念を翻訳して輸入したことになります。ニートは経済戦略の欠陥を誇示する言葉として、瞬く間に私たちの社会をとらえてしまいました。これは若者の側からいえば、ニートだとみなされることは、心に欠陥をもつ若者だというふうに烙印を押されることに他ならない。これは大きな問題だと思っておいていただきたい。私は、ニートは若

者の心の欠陥が産む現象だと理解するのは不十分だと思っています。

## 二　若者の職業社会への意向のゆらぎ

### (1)高卒無業者

高校を卒業後に進学も就職もしなかった、これを高卒無業者と呼んでいますが、私は、そういう若者たちの問題を扱ってきました。現在、フリーターとか、ニートと呼ばれる若者を、この無業者という言葉は含んでいます。

### (2)高卒無業者の漸増

日本社会では一九八〇年代までは、高校を卒業した者の進路が、進学と就職という二つの重要な選択肢としてありました。

国際的に見ても、日本社会というのは、学校と職業世界との間の円滑な移行が可能であった社会である、と特質づけることができます。

第一に、学校と職業世界が、時間的に全く隙間がありません。三月三十一日に卒業して、四月一日に職業世界に入ります。また、卒業後、若者たちが職業を選択するために様々なコストを支払う必要もありません。なぜならば学校と職業世界との間に、大量に若者たちを採用してくれるような企業と、若者たちを企業へと送り出す学校との間に、太いパイプがあり、それをただ通っていけばいい仕組みが成立していたわけです。その意味でいえば、非常に社会的なコストも小さいし、学校と職業との間の接続システムというのが、日本社会では成立していたということになります。

このような、日本的な学校と職業社会の接続についてのシステムが崩れる兆しが見えだしたのは、一九九〇年代のことです。九〇年代になって、若者が職業世界へ入っていくときの様式に変化が見られるようになりました。高校卒業者数に対する無業者数、それが無業者率ですが、九二年に四・七パーセントとなっているのが、二〇〇四年には一割を超えるようになりました。

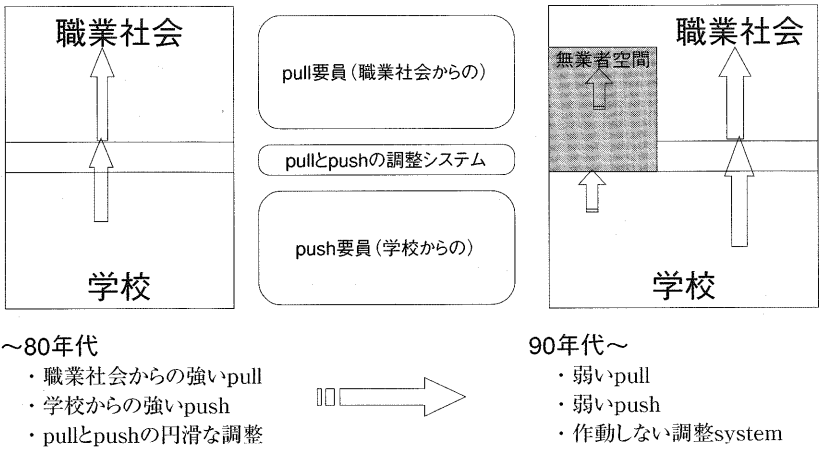
### (3)どこで見られるか

地域的な差異が大きいとはいえますが、大体高校卒業したものの一割ぐらいが高卒無業者にというカテゴリーに含まれていると考えてよいと思います。このように日本社会では九〇年代の初期、半ばまでは高校と職業世界との間に移行システムが成立していたのが、徐々に崩れてきている。いまや進学をするでもない、定職に付くでもないというという若者たちが発生をしてきた。当初それは、大都市圏に特徴的に見られる現象だったわけですが、徐々に地方へと浸透していっている。そういう様を見ることができます。

## 三　教育システムの変容と高卒無業者

### (1)学校から職業社会への移行システム

この現象をどうとらえるか、それを図に示したのが図1です。pullとpushにより、素朴な見取り図を描いています。この図の左側の部分が八〇年代までの説明です。右側の半分が九〇年代以降の変化を示したものです。ま




図注釈　pull＝新規高卒労働力需要
push＝教育システム（①教育理念②進路指導（調整システムでもある）③高校生文化）
Pullとpushの調整システム＝進路指導と就職慣行

図1　学校から職業社会への移行システムの変容

た、この図の上半分はpull要因を示し、下半分はpush要因を示します。真ん中の「pullとpushの調整システム」は、両方を調節するためのシステムです。

pullとは職業世界が若者を吸い上げる力のことを指します。どれだけ労働市場が、若者を受け入れて雇用するかということです。pushとは学校から職業世界に向けて若者を押し出す力がどれだけあるのかという問題です。

八〇年代の図は職業社会からの強いpullがありました。労働力の受容が大きかったというのが最大の要因です。同時に学校から、職業世界に向けて若者たちを送り出す強い力も描かれています。その真ん中にあって、pullとpushの調節をしている、これは就職を斡旋する仕組み、あるいはそれを受け入れるときの採用の仕組みですが、これが円滑に機能していました。この結果として、学校は進路を保障することができたし、企業の側からも大量に労働力を調達することが可能でした。

### (2) pull要因の変容

それに対して、九〇年代以降は変化があります。第一に、pull要因の変容です。職業社会が、若者たちを引き込む力が弱くなったという問題です。つまり、高卒者を求人する企業が少なくなったということです。「新規高卒労働市場の狭隘化」を注目しておかねばなりません。要するにパートやアルバイトによって労働力を調達しようという傾向が強くなったということです。この傾向が続く限り、若年労働市場がもとの水準にまで回復するということは、考えられないと思われるところです。

### (3) 教育理念と進路指導の変容　push要因

#### 1　教育理念の変容

学校・教育というのが、若者たちを職業世界へと送り出す力が相対的に弱くなってきたという問題です。九〇年代というのは、「失われた教育の九〇年代」という言葉があるくらい、変化に富んだものでした。以前の構造が壊れてきたりしました。また、必ずしもそれに代わる

新たな構造ができたわけでもありません。

九〇年代に起こったことの一つが教育理念の変容です。それを象徴的に表すものが個性重視の原則と呼ばれていたものです。この時代、たとえば学校、特に高等学校等での選択科目が拡大をし、評価基準の多元化・多様化が進む様子が見られました。それから、学校制度の複線化が進んだときでもあります。また、義務教育のレベルでも学校選択の自由化が始まったりしました。教育内容の大幅な削減をおこない、行政からいえば、教育内容の精製・厳選などが進んだ時期でした。

こういう教育政策とか教育理念が変化していく中で、進路指導のあり方についても、ずいぶんと指導の仕方が変化した時期でした。

## 2　進路指導の変容

「人はvalue×possibilityの数値が大きい選択肢を選ぶ」。これは、社会学的な理論の中の職業選択の考え方です。

valueというのは、ある選択肢がもっている主観的な価値です。たとえば、高校を出た子どもが選びうる選択肢の中に、医学部へ進学をして、将来医師になるというものがあります。私にとってはほとんど0に近い選択肢といっていいものでしたが、人によっては、医師という職業に絶対就きたい、医師という職業は人々を救う上で非常に重要な職業だし、自分の使命だというふうに考えて、だからこの選択肢の本人にとっての主観的な価値は非常に大きいということはあるでしょう。あるいはこの選択肢のvalueが非常に小さくて、私のような考え方をする者もいる。

もう一つ、その選択肢のもっている特性として、possibilityというものがあります。つまり、その選択肢の実現可能性がどれだけあるかということです。

ある人は、どうしても医者になりたいというふうに

思っているけれども、残念ながら学力がほとんどそれに対応していない、あるいは家庭の財力がそれに伴っていなくて、possibilityが0であるというケースがあります。この場合その人にとって医学部へ進学して医師になるという選択肢の数値は、value×possibilityで、valueは非常に高いかもしれないけど、possibilityは0ですので、0になる。ですから、その選択肢を選ぶという確率は小さくなる。逆の場合もあります。

この理論は要するにvalueとpossibilityの関連において、人々にとって、選択肢のもっている選ばれる確率の高さを示すというふうに考えればいいと思います。

子どもたちと一緒に進路選択を考える上では、二つの要素が不可欠だということです。まず、第一に自己を知る。何を志向するか、自分が何をしたいのかということが、ある程度わからなければ、valueの側面がダメです。もう一方で、機会構造も知らなければなりません。何が必要かということも知らなければなりません。この二つの要素が適度に実現されて、初めて合理的な進路選択が可能だということになります。

九〇年代以降、進路指導において重視されたのは、非常に単純化していえば、「あなたは何をしたいか」「あなたは何になりたいのか」という子どもたちへの問いかけでした。これは、それと裏腹に、どこに入れるか、あるいはどういう職業が準備されていたのか、手に入るのか、どういう学校に入学することができるのかという機会構造、可能性が、その分軽視されてきたということです。

なぜ、そのようにpossibilityではなく、valueが重視される時代を迎えたかというと、それは当然、それまでの進路指導とか、子どもたちの指導についての反省があったからに他なりません。つまり、九〇年代初頭までの、広い意味での進路指導というのは実現可能性を重視していました。就職指導を前提にすれば、入りたい会社よりも入れる会社、就きたい職業よりも就ける職業というものを重視して、とにかく、まずは職業機会を手に入れることを教え込んできたわけです。進学指導の場合でも、

これは何を専攻したいか、何を学びたいかということよりも、どの大学に入りたいかということのほうが重視されました。

そこに見えるのは、やはり、何を学びたいか、何を将来やりたいかというよりも、どこに入りたいかという機会構造の側面であるということができます。

こうして、九〇年代初頭までの子どもたちの進路指導においては、valueよりもpossibilityがともすれば重視されていた。それに対する反省として、possibilityではなくvalueを重視する。何をしたいのか、何をやりたいのかを重視する指導が強調されたといっていいと思います。これが、ある特定の進路へと子どもたちを進路づける、その進路を選び取るように仕向ける学校の力というのを弱体化させることになりました。

## 3　高校教員の進路指導「理論」の抽出

フリーターを輩出している高校の先生方にインタビューをして、どういう特徴があるのかということを調べたことがありますが、二つに整理することができました。

第一の特徴は、希望・自己選択の重視というものです。希望・自己選択の重視というのは、生徒の選択を優先し、夢や希望を捨てないように指導をする。第二に、非進路強制です。生徒が自分で、私はこういう職業を選択したいというふうに、その、生徒が自分で選択したことについては、たとえそれが、「しばらくの間はフリーターでいい」というような選択であっても、先生は何も言わない。非進路強制という特徴をもっていたわけです。

たとえ進路未定者が出たとしても、彼らが自分探しの旅に出るなら、それはそれでよいではないかという考え方が、強くなってきている。これがpushの弱体化の一つの要因ではないかと思います。

〈次号へ続く〉

（お茶の水女子大学）

（講演平成十八年二月十六日）

☆抄録責任　編集部

# 差異を差別にではなく学びへと転換する

津守　眞

現代はそれぞれの家庭が、いろいろの問題を抱えている。外からは平穏で幸せに見える家庭でも、母子家庭だったり、父子家庭だったりする。あるところでは、障碍の子がいたり、手のかかる老人がいたりする。そのような差異を差別とするのではなく、人生の学びとするにはどうしたらよいのだろうか。

## 流れが妨げられたとき

私の身近な家庭でのことである。その子の家は新築の一軒家に引っ越したばかりだった。私が訪問したとき、その家の中で末っ子のその子は濡れ雑巾を振り回して、あたりが水浸しになっていた。兄、姉

たちの声、それを止める声などでその家は賑やかだった。その子は洗面所で水を出し、シャワーを指差して、キーと叫んだ。私が水を出してあげると、その子は静かになったが、周りの人たちに水がかかった。その子がたえずキーと言うのは、その子が何かをするたびに止められるからだということは明らかだった。その子の生活は絶えず中断されて流れていない。私は濡れてもいい服装をして、一歳半のその子と水遊びをした。その子の服を脱がせて湯を出したらすぐに大便をした。緊張がほどけたのだろう。しばらくじっとして、私がきれいにするのを待つ。

その子はバケツにタオルを何枚も入れ、一枚ずつ、バケツの縁に丁寧にかけた。私はその子と一緒にそれを眺めた。きれいに並んだタオルは芸術作品のように思えた。郊外にあるその子の家では夕方になるとカッコウの鳴き声が聞こえる。その子は「アッオウ」と言って、キャキャと喜びの声をあげた。その子が何かを取って欲しがるたびに、私は手桶や石鹸を取ってあげて、そのたびに私は「この子の言うことは本当なんだ」と自分に言い聞かせ、この子の笑い顔を見て笑った。途中で寒かろうと思ってお風呂の中に入れようとしたが、イヤと言って、身をよじる。そういうときの意思表示ははっきりしている。私は一つひとつ、そのときのその子の心に応えようと努めた。雑巾をかける喜び、容器をひっくり返す喜び、容器に水を入れる喜び。一瞬、一瞬に思いが満たされ喜びがあった。その間に、私はその子との距離が近くなり、中断されて滞った流れが再び流れ始めた。その子も私を信頼する親しみが増してきた。

四人の子どものいるその子の家は、隣家から絶えずうるさいと文句を言われたり、電話がかかってきて、両親にとっては毎日がストレスの連続だった。

その子は隣家の人と目を合わせなくなっていた。

小学生の姉が、「ジジちゃんはパンツ一枚になって、桶に腰掛けて一緒に水遊びをする」と母親に言った。兄姉たちも絶えず叱るのは良くないとわかってきたようだった。

父親も家に帰ると絶えず緊張していなければならないと語った。高いローンをかかえ引っ越しても、子どもたちの笑顔がなかったら、何のための苦労かわからなくなってしまうだろう。父親は憔悴して家に帰ってきた。引っ越してから、急に痩せたと言う。会社に行っても昼休みのときなど、今頃家ではどうしているだろうと思うと心配でと涙ぐむ。母親が炎天下を近所から文句を言われないようにと朝から自転車に小さい子を乗せて走っているのかと思うと、何もしてあげられないのが申し訳なくてと言う。「障碍をもつ子の親はどうなんだろう」。父親の言葉は真に迫っていた。

## 愛育養護学校で

キーと声を出したり、物を投げたりして、幼稚園で他の子たちと一緒にやっていかれないと言われ、この学校に相談に来る人が増えている。運動会や発表会などの行事のときが特に多い。生活の流れが妨げられ、中断されて子どもが本当にしたいことが満たされていないことがいかに多いかを示しているのではないか。

長年にわたって愛育養護学校をしばしば訪問された佐藤学さんが、『学びとケアで育つ』（小学館二〇〇五）の冒頭で、愛育養護学校の特色として二つのことを挙げておられる。

第一は、子どもが学校の主人公だということである。実際、二〇数年前に私がこの学校の校長になったときに考えたのはこれであった。たとえ家庭や社会の生活で誤解されたり、自分の存在の価値を疑う

ような体験をしている場合も、ここに来れば自分が主人公になって遊び、活動し、くつろぐことができる、そういう学校をつくりたいと私は考えた。主人公になるとは、佐藤によれば、『自らの願いと意志によって一日の生活と実践を創造すること』である。このように簡潔な語で示されるといっそう明瞭である。願いは無意識に心の奥に湧き起こる内なる力であり、意志は意識的な、時には決意をもってする主体的行為である。子どもが叫ぶ場合には両方があるだろう。子どもがわがままと見えるほどに自己を主張するとき、その叫びに本気に耳を傾けることがなかったら保育も教育も始まらない。

第二の特色は、『発達の壁、あるいは障碍の捉え方』であると佐藤は指摘する。佐藤学によれば、『学びの実践は差異と出合うところに成立する』。障碍は個人に内在するのではなく、社会（おとな）との関係の中にある。大人と子どもとが協同でその壁を克服すること、すなわち、『個性や経験の差異を差別にではなく学びへと転換する実践が求められている』。障碍をもつ子ども（人）を別の種類の人間として自分たちとは違う別枠に入れて、いわば片付けてしまうことを私はしたくない。診断名や呼び名に振り回されてはならない。その子と直接に触れて、そこでわかったことを実践の根拠とすることから保育は始まる。自分の常識には合わない他者の行動に出合うとき、私共は行動をその子の心の表現として見る必要に迫られる。そこでは自分の考えの枠組みを根底から変えねばならないことも起こる。知識の網の目に位置づけることが理解ではなく、自分自身が変えられることが理解の本質である。

大人も子どももそれぞれ違っているのにそれをひとつの枠に入れようとするので、あの子は異常だと考えて、自分の中に壁を生み、他人との間に壁をつくる。それを克服してひとつの生活をつくるのが実

践である。常識に揃えようとすると、そこが差別を生む地盤にもなる。どの場合にも、それを克服する実践がなければ抽象的、観念的になる。これは人の一生を通して終わることのない実践である。その実践を継続させる力は、広い教養と文化である。私共はこの社会に生きて違う経験をしている人たちと交わり、常に柔軟に変えられる自分自身をつくらねばならない。それなしには人生は完結しないほど難しい作業である。

このように考えると、第一と第二はつながっている。だれでも、自分の人生を全うするのに、差異や障碍を別枠に入れて済ますことはできない。これまで私が実現したいと願いつつ、日々当面した保育の体験をこの誌上で語ってきたが、私が言おうとして言いきれなかったことを、佐藤学さんは簡潔に指摘されている。

## ある日

いつも棒を振り回しているS夫が二階の窓から、庭で遊ぶ子どもをジッと見ていた。他の子との間には空間的距離がある。幼稚園では乱暴とレッテルを貼られている子どもだが、この子の傍らで話しかけ、交わりながら見ていると、にこにこして私を見る。親しみ深いのだが、私から触られるのはキライなようである。棒を振り回しているときには相手は近寄らない。棒を振り回す行動には、乱暴という一つの解釈があるのではない。担任はS夫を恥ずかしがり屋だと言う。相手を近寄らせないための行動と考える方が妥当である。私がこの子に無神経に近付くのではなく、でも近付くのをやめてしまうのではなく、控えめなやりとりをしていると別の展開がある。

その直後、別の元気の良い子が高いところから飛

び下りては若い男性職員に抱きついて笑い合うのを熱心に見ていた。S夫もひとりでひっくり返って大笑いしていた。高いところから飛び下りるのを受けるのだから、若い職員にとっても大きなエネルギーを要していることは明らかで、S夫まで誘って遊ぶ余裕はなかった。もしも傍らにいた私が若い職員と同じようにその子が飛び下りるのを受けていたら違う展開があったかもしれない。しかし、私にはそれだけの体力はないと自分で思ってしまった。この思い方には問題がある。年齢を考えて控えめにするのは必要だが、自分にもできる分がある。老人のすることではないといつも考えていたら、大事な保育のチャンスを逃してしまう。これは自分の判断で決めることである。差異と差別を克服するのには、「願いと意志」を働かせる、控えめだが積極的な実践が保育には必要である。佐藤学が言うように「この複雑で高度な実践研究」は、どの年齢の人にもそれぞれに違った仕方で求められている。

## 「差異を差別にではなく学びへと転換する実践」を

他の学校や園では断られた子どもたちの通える場所をつくりたいと考えたところから愛育養護学校は始まった。今もそうである。子どもたちの性質や障碍は違っても、どんな子どもが来ても、ひとりの人間としての願いと意志を尊重するのが保育である。「差異を差別にではなく学びへと転換する実践」をしたいと思う。このことは昔も今も変わらない。流れが妨げられて、水遊びを始める子どもに向かう大人の覚悟。子どもがそれを始めた願望と意志を信頼し続けること。大人の都合の悪いことをも子どもの表現として理解し、その奥にある心に応えようとすること。そのことが未来を開く。学校でも家庭でも。

（保育研究者）

日本保育学会五十九回大会に参加して 1

# 木育フォーラムを振り返る

## ―木育が伝えるぬくもり・つながり―

高橋　真由美

「木育（もくいく）」という言葉を聞いたことがありますか？　おそらく多くの方が初めて耳にする言葉だと思います。「木育」とは、北海道が平成十六年度に設置した官民協働プロジェクトチーム「木育推進プロジェクト」により検討され、報告・提案された新しい言葉です。このプロジェクトの報告書では、「木育」を「子どもをはじめとするすべての人びとが『木とふれあい、木に学び、木と生きる』取組であり、子どもの頃から木を身近に使っていくことを通じて、人と木や森とのかかわりを主体的に考

えられる豊かな心を育むこと」としています。

「木とふれあう」とは

「五感と響きあう感性」をバランスよく育むために、心の健やかな発達のために、木の道具を使うことや生活空間に木を増やすこと・木や森と積極的にかかわることです。

「木に学ぶ」とは

遊びや日常のなかで、「モノを創造する知恵や力」を養っていくために、北海道の森林や道産の木材、それらを取り巻く社会環境を、学校や地域のさまざまな学びの中に取り入れることです。

「木と生きる」とは

森と木を通じた暮らしの中から「人間が本来生きるための本質的な力」を呼び起こし、私たちの生活を木に寄り添い、共に生きるものにすることです。

（「木育推進プロジェクト」報告より）

生活環境や自然環境の変化によって、人と人、人と自然、人とモノ、モノと自然のつながりが希薄となり、社会や自然にさまざまなほころびが生じている現在、人の「心」を豊かに育むこと、人と木や森とのかかわりを見つめ直し、それぞれのつながりを改めて育むことを「木育」は目指しているのです。

私がこの「木育」という言葉に出合ったのは、日本保育学会第五十九回大会準備委員会の企画会議の席でした。企画案の資料の中に「木育」という言葉を見つけ、その内容に非常に興味をもちました。

「木育」を学会で紹介することを最初に提案したのは、大会準備委員長でもある札幌大谷短期大学の大西道子先生でした。大西先生は、木育推進プロジェクトのメンバーであり同大学で木工を専門とし保育

絵画を担当されている清水郁太郎先生から木育の取組に関する話を聞き、平成十七年三月に開催された「木育フォーラム」に参加されました。フォーラムで話を聞いているうちに、森林が総面積の約七割を占めているという北海道の土地で、木と五感でふれあうことにより感性を高め、人や自然に対する思いやりとやさしさを育むことが、北海道らしさを生かした子育てなのではないかと思ったそうです。そして、第五十九回大会は北海道の特色を生かしたものにしたいと考えていたこともあり、学会の場で「木育」を紹介したいと提案するに至ったそうです。

大西先生からこの話を聞き、その想いに共感した私は、この企画を担当させていただきたいと名乗りをあげました。

この「木育フォーラム」で私たちがこだわったのは、「木育」の取組をパネル展示で紹介するだけではなく、学会に来られる方々に何かしら「木育」を体感していただくような企画にしたいということでした。企画の段階でさまざまな困難に出合いもしましたが、たくさんの方々の協力により、木育パネル展示、木育講演会、木の体験の四つの企画を「木育フォーラム」として行うことができました。

当日、パネル展示には北海道庁の担当者が説明につき、学会参加者の質問に丁寧に答えていました。木育講演は西興部村森の美術館「木夢（こむ）」館長で、木のおもちゃ作家である伊藤英二先生に「子どもたちに伝えよう、木のぬくもりとやさしさを」と題したお話をしていただき、たくさんの方に参加していただきました。

さらに二日目の午後には、会場の裏手に広がる野幌森林公園内にある自然ふれあい交流館の協力を得て、木育がめざす「五感と響きあう感性」を育む森

の体験プログラムを実施しました。野外での企画に参加者が集まるのだろうか？　心配もしましたが、自然ふれあい交流館の方々の「たとえ参加者がひとりでもやりますよ」という言葉に励まされ、当日を迎えました。

実際には、幼稚園・保育園・保育者養成校の先生二十四名という当初予定していた定員をオーバーするほどの参加があり、早春の北海道の森の中で、五感をつかって木を身近に感じるひと時を過ごしました。この日は気持ちの良い青空がひろがっており、一時間半ほどの時間ではありましたが、参加者の一人ひとりが生き生きとした表情でプログラムを体験され、終わる頃には参加者の中に連帯感のようなものが生まれていたことが印象的でした。

多くの学会参加者の目にとまったであろう、木のおもちゃの一般公開は両日とも午後からの開催でしたが、近隣の幼稚園児などあわせて八十四名の子どもたちとその保護者が木の砂場、魚釣り、パズル、ままごとハウス、木馬などで楽しいひと時を過ごしていきました。

これらの木のおもちゃはすべて木育講演をしていただいた伊藤英二先生がデザイン・制作されたもので、伊藤先生のアイディアが随所に生かされた温かみの感じられるものばかりでした。特に、道産木材で作った木の玉を敷きつめた「木の砂場」の感触は大人にも好評で、学会参加者の中にも子どもと一緒に砂場にはいり、その感触を楽しんだ方も多かったように思います。

これらの木のおもちゃで遊ぶ子どもたちの表情、遊び方を見て感じたことがあります。それは、木のおもちゃに触れた途端に、ほとんどの子どもがなんとも言えないうれしそうな表情を見せ、生き生きとおもちゃとかかわっていたということです。特に「木の砂場」に一歩足を踏み入れた瞬間の子どもた

▲木の砂場の感触を楽しむ子どもたち

ちには、見ているこちらも思わず微笑んでしまうようなやわらかでやさしい表情が見られました。さらに、どの子どもも、おもちゃの扱いがとても丁寧であることにも驚きました。なぜだろう？　と考えていたのですが、その理由が伊藤英二先生の講演をお聞きしてわかったような気がしました。

講演の中で伊藤先生は、自分は子どもたちからいつも夢をもらっている、その子どもたちが木のおもちゃのやさしさや温かみに触れ、自然のもつ本物の良さを感じながら生き生きと遊べるものを作りたいと話されました。先生が作るおもちゃにはそういう子どもたちへの想いが込められているのです。おもちゃを手にした子どもにはその想いがしっかりと伝わっていたのではないでしょうか。おもちゃに触れた瞬間、子どもが見せる表情、遊んでいる時の様子、それは伊藤先生が心を込めて作ったということを無意識のうちに感じているからこそ見られた様子

ではないのか、私はそう思いました。大量生産、大量消費の時代に子どもたちにはなかなか伝えることのできない、モノに込められた人の気持ちを伝えることができるのが、ぬくもりあふれる木のおもちゃなのかもしれません。

第五十九回大会のテーマは「拓く・展がる・つながる」でしたが、この「木育フォーラム」も木を通してさまざまなつながりについて考える場にしたいと思っていました。来場した子どもたち、講演を聞いた方々、パネル展示を見た方々、そして森での時間を過ごした方々は、さまざまな角度から「つながり」を感じたことと思います。私は保育において、子どもたちに「私たちはまわりのいろいろなものとつながりながら生きているのだ」ということを伝えることが大切だと思っています。「木育」はまさにその「つながり」を育むことを目指すものです。新しい言葉ですが、その根底には、昔から大切にされてきたことを見直す、ということがあるのかもしれません。

この企画を通して、新しい「つながり」が生まれたことも大きな成果でした。木のおもちゃを貸し出してくださった伊藤先生、それを運んでくださった株式会社北樹さん、会場設営・撤収作業やパネル展示に協力してくださった北海道庁の職員のみなさん、森のプログラム体験を実施してくださった自然ふれあい交流館の職員さん、おもちゃの一般公開のためにお手伝いいただいた札幌大谷短期大学の関係者のみなさん、この企画に携ってくれたすべての人が「木育」の名のもとに協力しあい、つながりあえたと思います。このようなつながりの尊さ、そして「木育」の理念がこれからの保育の中に根付いていくことを期待します。

（藤女子大学）

# 日本保育会第五十九回大会に参加して 2

# 「つながり」と「育つこと」

吉川　はる奈

日本保育学会第五十九回大会に参加し、多くの報告を聞く機会をえた。

今回の大会では、私自身は「つながり」と「育つこと」について、感じたり、考えたりすることの多い時間を過ごしたと思う。

北海道において、地域のつながりをつくりながら、子育て支援の実践、保育実践を行う報告も数多く聞いた。そのいずれの報告でも、地域のもつエネルギーとそこに住まう人々のエネルギー、実践を支える保育者をはじめ多くのスタッフのエネルギーを感じることができた。そのエネルギーの源は何か、ふとそう思った。

子どもの幸せを願う気持ちなのだろうか。

「ノー」を言う人はいないだろう。しかし、実践報告にあふれでるエネルギーからは、実践者の、つまりそれにかかわる人々自身の喜びが伝わってくる。この実践者とは、かかわる人々すべてをさす。保育者はじめスタッフ、そして家族も含む。報告の中で、ある保育者が、「何でこんなに一生懸命続けているのかわかりませんが、でも『ほっておけない』という気持ちなのです」と答えていた。

私自身も子育ての支援の場にかかわっていて、さまざまな親子に出会う。十年ほど前になるが、忘れられない親子との出会いがあった。

はじめて会ったとき、母親は、その雰囲気からは、年齢よりずっとふけて見えた。疲れきっていたのかもしれない。エネルギーのある一歳の子どもを抱えて「どうしていいかわからない」という様子だった。児童館のグループをすすめられて行ってみたけれど、入れずに行かなくなってしまっていた。入れなかったのは、もちろん母親のほうで、子どもはエネルギーにあふれているので、児童館のような広い場所に行けば大喜びであったらしい。しかし、母親にとって入りにくい場所に行くことは耐えられず、家の中にいることが多くなっていたらしい。

そのような状態の時に親子に出会った。地域にはたくさんの遊び場がある。

しかし、エネルギーがあふれ、家での遊びに飽きてしまい、家族が困り果てている親子、コミュニケーションがとりにくく、不安を感じている親と子、家以外の場所やはじめての場所に緊張が強い子どもと親など、「育てにくい」と感じている親と子が安心して遊ぶ場所がなかった。

そのような親子にと、地域の保健師・保育士・相談員・ボランティアが支援の場に加わり、小さな親子グループができ、そこにこの親子もやってきたのだった。

子どもは広いスペースに生き生きとした表情で走

り回り、母親以外の大人にも笑顔を振りまき、楽しそうであった。一方、母親のほうははじめの数回はどうしていいかわからず、疲れきった表情を見せながら、参加するのに精一杯という感じであった。

とはいえ、休まずに参加していたので、このまま続けてほしいというのがスタッフの願いであった。

そのような時に母親が第二子を妊娠し、大きなお腹を抱えながらの参加になった。それでも休まなかった。このころになると、母親からは「来るのが子どもだけでなく私にとっても励みになっている」ということばが出るようになっていた。結局、臨月直前までやってきた。

第二子が誕生し、間もなくその親子がやってきた。二か月になったばかりの第二子を抱え、兄になった子どもをつれてやってきた。母親の元気そうな表情を見て、スタッフも一同、ほっとした。

このような形でふたたび参加を開始し、母親も子どもも着実に自信を得ていくように見えた。家では第二子の誕生で、兄に思うように向き合えない母親が、会に参加している時には、他のスタッフが第二子を抱っこしていてくれ、無理なく、子どもに向き合うこともできた。また、スタッフが第二子の成長を一つひとつ喜んでくれることもうれしかったらしい。

このような中で、親子は着実に成長していった。その後、母親はもう少し、参加の場所をふやそうと、幼稚園の園庭開放に通うようになっていた。同じグループに参加していた他の親子にきいて、自ら子どもをつれて参加したという。

さらに二年後、子どもが幼稚園に通うようになってからは、第二子をつれて、児童館の親子グループの運営スタッフとして楽しんで参加していることを知った。以前には、児童館の親子グループはグループが大きく、また「できあがっている雰囲気があ

り」、とても参加することはできないといっていた場である。

たくさんの時間を支えられてきたひとりの母親が、支える人として成長していく姿を見ていたように思う。

子育て支援の場では、子どもの成長とともに母親の成長にも出会う。まさしく「ほっておけない」と思う人々の支えの中で、母親や子どもが育っていく。

そこで見せる子どもや母親の成長のプロセスにじっくりつきあっていくと、子どもと母親の姿に自信が見られるようになる。

母親自身が自分の行為に自信をもてるようになること、それは、「育てる」という行為そのものへの自信とともに、忘れかけていた自分自身の存在価値を取りもどすプロセスであるように思う。

はじめに戻るが、子育て支援にかかわる人々からあふれるエネルギーも、自身の存在価値を感じるプロセスからうまれてくるのではないかと思う。したがって、母親も子どもそれを取りまく支援にかかわる人々も、長期にわたって自身の存在価値を感じることができるようになるプロセス、そのような中で「つながり」がつくられていくことが大切であると思う。

子育て支援とは、子どもが「育つこと」のみ、母親が「育つこと」のみを求めているのではなく、そこにかかわるすべての人が「育つこと」を目指していくものではないか。そして「育つこと」は、個々の存在価値、すなわち母親自身の存在価値、子ども自身の存在価値、そして保育者その他のスタッフ自身の存在価値をそれぞれが感じることのできるような、「つながり」の中で、生涯にわたって求められるものなのではないだろうか。

（埼玉大学）

# 保育の中のつながりを求めて

伊集院　理子

今年度、私は四歳児の担任となった。三歳児からの進級児二十名、そこに新入児十五名が加わって、総勢三十五名の子どもたちとの生活が始まった。私は、なるべくまっさらの気持ちで子どもたちと出会い、一人ひとりの様子をじっくり見て、一人ひとりとていねいにやりとりを重ねていくことを心がけてきた。子どもたちは、それぞれに大きな環境の変化を体験していたにもかかわらず、緊張感はもちながらも、新しい環境をそれぞれのペースで確かめながら、少しずつ少しずつ環境に馴染んでいった。

新しいクラスでの生活が少し軌道に乗りだしてきた四月の後半のある日、A子が突然、「美容院、やりたい」と私に言ってきた。私は、どこかに仕舞っておいたはずの紙で作ってあるはさみを即座に探した。昨年、五歳児を担任していた時に、年に何回か美容院ごっこが盛り上がり、その時に使ったものを取っておいたはずだった。昨年の子どもたちが幼稚園から巣

立った後も、そのはさみが有効に使われる時がまたくるかもしれないと思い、捨てずに取っておいたのである。

はさみを探しながら、A子が三歳児の時、よく五歳児の美容院にお客として来ていたことを、ふと思いだした。まわりのことがよくわかり、頭がまわるA子なので、多分、私がもと五歳児の担任だったことを思い出し、五歳児のお姉さんたちがやっていたように、今度は自分がやってみよう、その時のお姉さんたちの担任だった私なら、その時と同じようにやれるのではないかと思ったのではないだろうか。その日は、すぐにはさみは見つからず、降園時間を迎えてしまったが、「お姉さんがやっていた美容院のはさみ、どこかに取ってあるから、明日までに必ず見つけておくね」とA子に一言伝えておいた。

次の日「はさみ、見つかったんだ」と言って、A子にそのはさみを渡すと、A子はおもむろに、保育室の中に置いてある衝立を二つ、それから、いくつもの椅子を廊下に次々出していった。その迷いのない準備ぶりに、昨年の五歳児のお店のイメージがしっかりあり、それを再現しようとしていることが伝わってきた。A子の動きに興味を示し、数人の子どもが手伝い始めた。どんどん店作りが進められる傍らで、美容院がそれらしくなるためには、はさみ以外に何があればいいかと私は考えた。A子と一緒に作ることも考えられたが、店作りをどんどん進めるA子の姿から、A子の心がむかっている先は、店を開店させ、お客さんを迎えることにあると判断し、子どもたちが店作りを進めているその脇で、私がもの作りをしてみようと考えた。

四歳の子どもたちにとって、そのものが刺激になって、自分たちでも作ろうとした時に、子どもたちの手で作れるものはどんなものか、どんな材料を使ったらいいのか、瞬時に多くのことが私の頭の中を駆け巡った。材料室から、縄跳びの縄、厚紙、すずらんテープ、ラップの芯、トイレットペーパーの芯など、必要

と思われる材料を取りだすと、子どもたちの元に戻り、私は、まずシャワーを作りだした。子どもたちのそばで、「シャワーがあるといいんじゃない？　お水も出ているようになるといいよね」などと言いながら、厚紙を半円形に切ったもの二枚で縄の一方の端を包むようにしてシャワーヘッドを作り、さらに水が出ているようにするために、すずらんテープを長く切ったもの数枚をヘッドの先につけてみた。次に、ラップとトイレットペーパーの芯をとめただけのドライヤー、厚紙を切った櫛なども作ってみた。

「これ、シャワーとドライヤーね。櫛もあるんだ。シャワーのお水は、細かく裂くと、もっとお水らしくなるかも」と言って、子どもたちに渡し、子どもたちがどう使うか、その先は子どもたちにまかせてみることにした。

少ししてから、店の様子を見に行くと、シャワーの水が細かく裂かれ、縄が廊下のスチームの管にちゃんと結びつけられていて、子どもたちなりに工夫している姿が見られた。お客さんが大分集まってきて、A子たちは、はさみで髪の毛を切るまねをしたり、シャワーで水を流したり、美容師になりきっていた。

少しすると、A子が保育室の中にいる私の所に「シャンプー、ちょうだい」と言ってきた。本物らしさをだすには、実際の容器に近い物がよいと考え、材料室で手頃なものを探してみたもののちょうどよいものが見つからなかった。そこで、部屋にある実際に使っているクリーナーの容器を使ってみるのはどうかと投げかけてみた。「これは、本物だから、蓋は絶対にあけないでね」と伝えると、A子は「わかった」と言って、勇んでお店に戻っていった。

ものとしてシャンプーが加わったことで、ただ水を流すだけではなく、先にシャンプーをして、それから流すという手順が意識されるようになったようで、A子とB子がその手順のことで言い合う姿が見られた。

「今もう流しているところなのに、またシャンプーかけないでよ」そう訴えるA子を見て、どっぷりと遊び

の世界に入り込んでいる子どもたちに感心した。そこは、〈嘘っこ（空想）の世界〉などではなく、〈本当の世界〉なのである。

お客さんが大分集まってきて、紙のはさみで髪の毛を切ったり、シャンプーをしたり流したり……と盛んにやっていたが、最後に何か飾りとして素敵なものをつけてあげられるといいと思い、各色の紙テープを子どもたちに渡してみた。すると、子どもたちは紙テープを長く切り、色とりどりの紙テープを直接お客さまの髪の毛にセロテープで貼りつけていた。一瞬、直接セロテープで髪の毛につけるのはどうかと迷ったが、子どもたちが編み出したやり方を尊重しようと考えた。色とりどりの紙テープを頭につけた美容院帰りのお客さまは、目を引き、それを見てお客が次々お店にやってきて、この日一日ずっとお店は大繁盛であった。

子どもたちが帰った後、私は、はさみをもう一つ作り、美容院の道具が一式納まる箱を探し、全てのものを箱の中に納めて、箱の上に「びよういんのおどうぐ」と書いておいた。そして、その箱を子どもたちの目に留まりやすい場所に置いておいた。

次の日、C子が目敏く箱を見つけ、一人で椅子を廊下にどんどん運び出して場を作りだした。C子は新入の子どもであったが、前日のA子たちの遊びの様子を見て、それをそのまま再現しようとした。一日置いてであるが、友だちの遊びの様子をとらえ、それを精力的に自分の遊びに取り入れていこうとするC子のパワーにまず感心した。A子たちも、次々登園してきて、もう場所ができているのを見て、そこに加わっていった。そして、進級の子どもたちと、新入のC子が一緒に美容院を開店して、この日もまたお店は多くのお客でにぎわった。紙テープは、ただ長くつけるだけ

ではなく、輪にして中央を別の色の紙テープで止めてリボンらしくしたりと、工夫が加えられていった。

一日の終わりには、美容院グッズは箱にしまわれ、また次の日は、興味を示した別のメンバーのもとで使われた。こうして、美容院グッズはクラスの共有の一つの財産として位置づいていくことになった。

また、紙テープに関していえば、美容院ごっこで使ったことがきっかけになって、その後、紙テープを使っていろいろなものが作られていった。ジャバラ折りのカラフルなバネを作って、それを腕輪にしたり、手のひらにつけて隠し持っていて、手を開くとビヨヨーンとなるのを楽しんだり……、思い起こしみると、こんなに紙テープを活用したことはこれまでなかったように思う。

こうして「美容院、やりたい」というA子の一言から始まった一連の美容院ごっこでの子どもたちの様子、そこでの教師の思いを綴ってきて、「子どもたちの生活はつながっている」ということをまず強く思うわけである。

環境が変わり、担任も変わり、A子なりに緊張感ももって過ごしていたが、一方で自分が一学年大きくなった誇りのようなものもA子の中にはあったのであろう。三歳児の時に五歳児にしてもらった遊びを今度は自分がしよう、自分がしてあげようという思いがあって「美容院、やりたい」というA子の言葉は導き出されたのであろう。その言葉の背景には、A子のそれまでの幼稚園生活の中での体験の積み重ねがあり、それがA子のそうした思いにつながっているのである。その思いを受け、教師の方も、「つなげていく」ことを意識して、以前に使っていたものを探すことから始めて、A子に働きかけていった。はさみを作ることは、大人にとってはそう難しいことではないので、A子の要望を受けその場ですぐ作ることも可能であったが、私は、前の年長児が使っていたものを探すことにこだわった。私の中に、学年を超えて、年度を超え

て、子どもの生活をつなげていきたいという思いがそこにあったからである。

教師は率先してお店らしくなるものを作ったが、子どもたちが自分たちの力で作ろうと思えば作れるもの、応用できるもの、先につながっていくものを強く意識していた。美容院グッズを一箱に納められるようにしたのも、生まれた遊びを先へとつなげていくために、意図的にしたことである。ひとまとまりになっていることで、興味をもった子どもが、興味をもった時に持ちだして使うという形で、時には大きな流れとなって、時には細々とこの遊びは続いていった。

子どもたちの遊び・生活は、そもそも「つながっている」ものなのである。その「つながり」を捉え、さらに「つながっていく」ようにするにはどうしていったらいいか、先を見通しながら「つなげていく」教師の働きかけが、子どもたちの生活、遊びをさらに「つながりあう」ものにしていくのだと考える。「つながり」が連鎖していくという感じだろうか。

私が保育の中の「つながり」ということを強く意識するようになったのは、いつ頃からだっただろうか。教師になりたての頃は、「つながり」など意識するすべもなく、日々怒涛のごとく押し寄せてくる子どもたちの要望にただただ追われるばかりであったことをふと思いだす。

「つながり」ということを強く意識しだしてから、倉橋惣三先生の「流れいく一日」（「幼稚園真諦」第三編保育過程の実際）という言葉がそれまでより一層深く意味をもって響いてくるようになった。幼稚園創立百三十周年の年にあたって、先人の教えに学びながら、朝来てからお帰りまで、昨日から今日へ、今日から明日へ、昨年から今年へ、今年から来年へ、必然的につながりながらずっと流れ続けていくような生活を子どもたちといっしょにつくっていこうと、志を新たにしているところである。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

# 編集後記

日本の現存する幼稚園としては最も古い（現お茶の水女子大学附属）幼稚園が創設百三十周年を迎えた。創立の日である十一月十六日を幼稚園記念日と呼ぶこともあるようだ。百三十という数字はそれほど切りのいい数字ともいえないが、学制（明治五年）公布後いち早く発足した小学校が、日本各地で軒並み百三十年を祝う時代に入ったのであり、しかしまだ「百五十年」を寿ぐほど、日本の近代はまだその身をさらされていないのだと改めて思う。

今号の文章には「つぐ」「つなぐ」というキーワードが目立つ。表題ばかりでなく、内容からも、子どもの生活を大人の勝手で切り刻むまい、過去のよき遺産を次世代に引き継ごう、という文脈が感じられる。自然の木のぬくもりを保育に生かそうとする試み（高橋先生）は現代の「恩物」に他ならない。今回のアーカイブズは、氏原先生による幼稚園五十周年目の回想（昭和二年）である。今から八十年前の時点での「昔日」の功労者への愛惜に触れ、いつの世もその只中の当事者は時代の先端にあり未来は見えていない、という当たり前のことに不思議さを覚えた。過去を振り返るまなざしの角度は、現在を見すえる視角でもある。本誌も、この古い幼稚園と共に歩んできた。今回の特集号を、本誌の今日性を考える機としたい。（浜口）

＊本誌へのご投稿をお待ちしています。youjimail@yahoo.co.jpまで。


幼児の教育

第一〇五巻　第十一号

（二〇〇六年十一月号）

定価五五〇円（本体五二四円）

発行　平成十八年十一月一日

編集兼発行人　浜口順子

発行所　日本幼稚園協会

〒112―8610東京都文京区大塚二―一―一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所　図書印刷株式会社

〒108―8620東京都港区三田五―一二―一

発売所　株式会社　フレーベル館

〒113―8611東京都文京区本駒込

六―一四―九

☎〇三―五三九五―六六一三（営業）

☎〇三―五三九五―六六〇四（編集）

振替　〇〇一九〇―二―一九六四〇

☆　本誌ご購読のご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。


☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

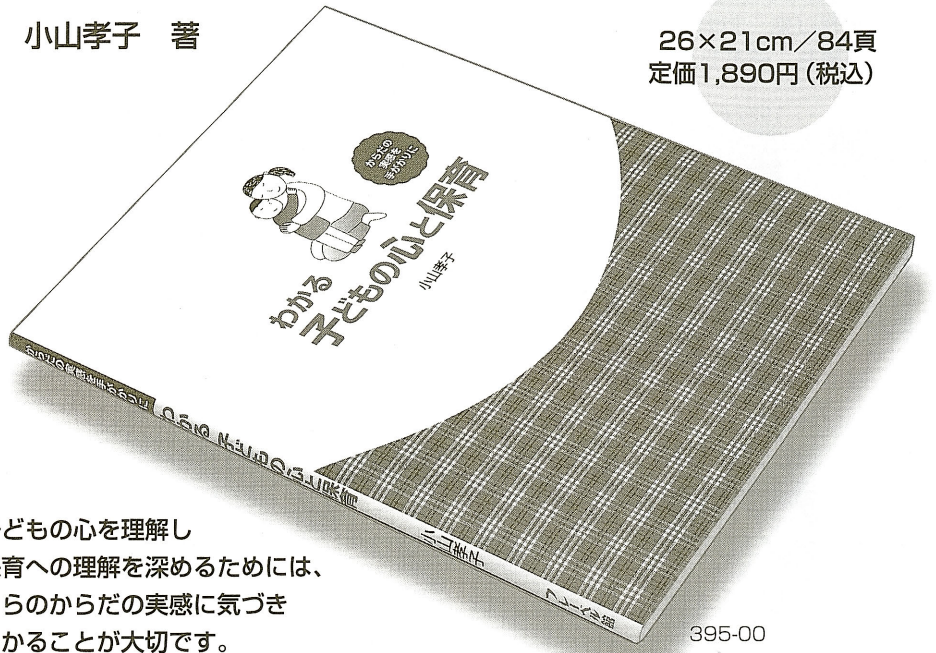
新刊

からだの実感を手がかりに

# わかる 子どもの心と保育

小山孝子　著

26×21cm／84頁
定価1,890円（税込）




395-00

子どもの心を理解し
保育への理解を深めるためには、
自らのからだの実感に気づき
わかることが大切です。
今まで「わかったようでいて
実感としてよくわかっていなかった」
カウンセリングマインドが、
「実感として理解できる」ための
ノウハウを12のエクササイズを
とおして実際に学ぶことができます。
保育者と親、そして子どもたち、
それぞれの心が響きあう関係づくりのために
ぜひ読んでおきたい一冊です。

● 目次から ●

はじめに
第1章　遊びながら学ぼう
第2章　フェルトセンスを確かめよう
第3章　子どもの立場と大人の立場
第4章　まるごと受けとめる
第5章　自分自身を受けとめる
おわりに
参考資料Q&A

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部（03）5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育　第一〇五巻　第十一号　平成十八年十一月一日（毎月一回発行）昭和二十三年四月十五日第三種郵便物認可


フレーベル館 創業100周年

# おかげさまで キンダーブック創刊80周年

1927年（昭和2年）に創刊された保育絵本『キンダーブック』は、2007年に80周年を迎えます。幼いころに手にしたご記憶のある方も多いことでしょう。
創刊以来、3世代、4世代にわたる長年のご愛顧ありがとうございます。
今後も、子どもたちの“生きる力”を養う確かな内容で、お届けしてまいります。

創刊号　1927（昭和2）年

1930年代

1940年代

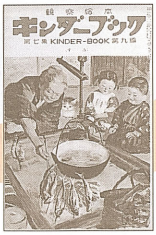
※時代を反映して一時期誌名が変わりました

1980年代

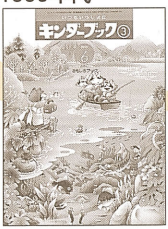
1970年代

1960年代

1950年代




1990年代




現在

2006（平成18）年

1・2・3歳向

5～6歳向

3～4歳向

1～2歳向

3～4歳向

4～5歳向

4～5歳向

2～3歳向

4～5歳向

100th フレーベル館　80th キンダーブック

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部（03）5395-6608にお問い合わせください。


定価　五五〇円（本体五二四円）☆